第3回中国大学図書館担当者訪日交流感想文

招聘期間 ： 2005年1月17日～1月24日

団 長　何 欽 成　中国医科大学 副学長、図書館館長、教授
団 員　楊 慶 臣　黒龍江大学 図書館館長、教授
李　鷹　牡丹江医学院 図書館館長 教授
李 継 凡　黒龍江東方学院 図書館館長
張 澤 梅　大連外国語学院 図書館副館長、
唐 先 輝　遼寧師範大学 図書館副館長
王 虹 菲　大連医科大学 図書館館長
黄 偉 七　清華大学 図書館副研究館員
劉　榮　南京大学 図書館
蒋　新　江南大学 図書館副館長
陳 夏 根　上海交通大学 図書館流通閲覧部主任
韓 恵 琴　寧波大学 図書館副館長、研究館員
姚　倩　広西師範大学 図書館副館長、教授
馬　農　中国国際友好連絡会亜細亜部副処長

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」報告書

中国医科大学副学長　何　欽成

第三回中国大学図書館担当者訪日団 18 人は日本財団に助成され、日本科学協会に招聘され、中国国際友好連絡会の指導の下で、2005 年 1 月 17 日から 1 月 24 日まで考察、交流に訪日しました。日本科学協会は早めに真面目に訪日団の考察交流日程を作成し、訪日中にも詳しく活動を手配しましたので、訪日団は訪問中にあちこちに関係機関及び関係者の暖かい歓迎と招待をいただきました。訪日団は訪問中に日本財団、日本科学協会の国際協力事業、日本の図書情報仕事現状、日本の科学技術発展、歴史、文化及び都市田舎の風景を了解し、日本の関係機関の皆様と実効に交流し、よく感心し大変勉強になりました。このような訪問活動は教育・研究図書有効活用プロジェクトの発展だけではなく、中日両国人民間の相互理解と友好情誼の推進に、中日両国民間の協力領域を開拓することにも深い意義と長い影響を与えます。訪日団が訪問した期間に、日本科学協会創立 80 周年記念式典が開催しました。訪問団の訪問活動も記念式典に現れた国際協力精神及び中日友好情誼を証明することになりました。

一　訪日考察概説

1.　日本財団、日本科学協会の高層リーダーを表敬訪問

訪問団は渡日した翌日に、全体団員は日本財団曽野綾子会長、笹川陽平理事長、森田文憲常務理事、日本科学協会濱田隆士理事長、梶原義明常務理事などの関係者たちを表敬訪問しました。訪日団長、中国医科大学副学長、図書館長何欽成教授は訪日団全体団員を代表し、日本財団、日本科学協会は多年以来に教育・研究図書有効活用プロジェクトを推進し、中国の関係大学を支援し、中国教育事業の発展を促進したことを心よりお礼を申し上げました。また、日本科学教会は日本財団の助成の下で訪日団を招聘し、滞在日程を真面目に手配し、暖かく招待することに深く感謝しました。曽野会長は「本が人間の知識の源泉です。良い本は人間の霊魂を浄化でき、人間の知識と情感を富まします。滞在期間に、訪日団は是非日本の良いことも良くないことも見学する必要があります。小説家として、人物を描く時に、常に良い、悪いことも書きました。人間に対して悪いものも有意義です。」と挨拶しました。また、曽野会長は「滞在期間に、お体に気をつけてください。よく日本の現状を体験してください」と言いました。笹川理事長は「図書館は大学の中心的な力で、学生に大きな影響を及ぼします。優秀な学生を養成したら、必ず図書館を充実する必要があります。教育・研究図書有効活用プロジェクトの実施は中国大学の発展に奉仕できることはいいです。人間の共同の知識は共有すべきです。中国教育部及び関係大学は図書寄贈プロジェクトをよく理解し、支持しました

ので、誠に感謝します。今は中国大学の選択性のために、日本側の図書の収集、整理、送付に対してより高い要求がありますので、更に大学図書館との連絡を強め、プロジェクトの推進はもっと理想的な効果を達させることについて検討する必要があります」と挨拶しました。また、笹川理事長は中国医科大学などの大学は日本語を活用して学生の専門教育を推進することをほめました。表敬訪問中に、訪日団は日本財団、日本科学協会にプレゼントを贈りました。

2.　日本科学協会創立 80 周年記念式典に出席

訪日団は日本科学協会創立 80 周年記念式典に出席しました。日本科学協会は訪日団に高い礼遇を与え、主催者に近い座席を手配し、また中国医科大学副学長、図書館長何欽成教授の挨拶を願いました。何欽成教授は「日本科学協会及び助成者の日本財団は中国に関する教育・研究図書有効活用プロジェクト、笹川科学研究助成、中国大学日本語学生日本知識クイズ大会など三つのプロジェクトを実施し、中国大学学術研究者を養成し、援助を受ける大学図書館蔵書を富み、学術情報の交流と活用を推進し、教師と学生の日本に対する了解及び友好感情を深める面で色々な成果を挙げました。また、日本科学協会の事業は益々発達し、人間が協和に生活し、世界は平和になることを祈念します」と挨拶しました。中国南京大学図書館の劉栄さんは濱田隆士理事長に南京大学が開発した日本関係図書資料コンパクトディスクを贈りました。訪日団の団員たちも式典に出席した日本科学協会理事たち、評議員たち、事業の支持者たちと広範に交流しました。

3.　図書館事業に関する訪問と交流

訪日団は国立国会図書館、国際基督教大学図書館、立川市立図書館などの違い 3 種類の図書館を見学し、日本女子大学田中功教授の日本大学図書館現状に関する講演を聴講し、田中教授及び三つの図書館の担当者と十分に相談、交流、検討しました。

田中教授は日本大学図書館数、学生数、大学図書館蔵書数、図書館コンピューター利用状況、インターネット状況、e-learning 利用状況、学術情報 website 及び大学図書館は一般市民に利用を供え、地域社会生涯学習の基地になる状況について紹介しました。訪日団の団員たちは田中教授の講演内容について、情報時代に大学図書館の組織及び館員の変化、大学生は情報を取得する生涯教育形式など 12 個の問題を田中教授に教えました。田中教授は即席に大部分の問題を答えましが、一部の情報が不十分の問題について、田中教授は確実な情報を取得してから団員たちに連絡します。

国立国会図書館などの図書館を訪問したときに、担当者は館内部門の見学をガイドし、図書資料の収集、利用及び利用者に便利な有効なサービスを提供する状況を紹介し、同時に団員たちの図書館管理、情報交流及びサービス提供に関する問題を答えました。

4.　教育・研究図書有効活用プロジェクトの協力機関の山種倉庫を見学

訪日団は図書寄贈プロジェクトの協力機関の山種倉庫を訪れ、現場で日本科学協会が日

本全国から集めた図書は分類、整理、登録され、中国の各大学の要求より選択、包装される過程を見学しました。団員たちは分けて各大学名称を標記した箱を探し、日本科学協会梶原義明常務理事、佐々木文君課長及び関係者、山種倉庫長谷川課長などと記念写真を撮りました。また、皆様の勤勉な努力を心より感謝の意を表せます。

5.　日本歴史、文化、社会と自然に対する了解と考察

訪日団は国会参議院、雪印乳業横浜工場、横浜山下公園、横浜中華街、山梨リニア実験線、イチゴ立体培養試験場、川口湖、石和温泉、箱根国家森林公園、彫刻森林美術館、大湧谷温泉を見学しました。訪日団は途中に白い雪で覆うきれいな富士山を見、各種の日本風料理を食べ、深い印象をつけました。

二　訪日団の収穫と体験

1.　教育・研究図書有効活用プロジェクトに対する了解及びこのプロジェクトの実施を協力する責任感を強め

訪日団は滞在期間に日本科学協会創立80周年記念式典に出席したとともに、日本財団、日本科学協会の高層リーダーを表敬訪問しました。訪問団はこのような活動より、教育・研究図書有効活用プロジェクトが大切な日本科学協会国際協力事業として日本財団の全面的な助成の下で推進されることを更に了解できました。日本財団は「人類の明るい未来に向け、頑丈な基礎を作る」という主旨を基づき、競艇の収益金の 3.3%を財源として、幅広い公益活動を推進しています。日本財団の海外協力援助事業は世界の各地域、部門間の交流と協力を促進し強めるために推進した公益事業の大きな4つの柱の一つとして、国際協力、各国間の友誼、世界の教育の発展を促進し、全世界人民の基本要求を満たしています。教育・研究図書有効活用プロジェクトは日本財団の海外協力援助事業の延伸事業として、日本財団の全面的な助成の下で日本科学協会に実施されます。日本関係会社、大学、研究機関、出版社などの協力を受け、関係図書を集めてから内容及び領域により分類し整理し、中国の 17 所の大学に寄贈し、中国の教育事業、中日両国人民の相互理解と友好情誼を促進しました。1999 年以来、中国の 17 所の大学に図書 112 万冊を寄贈しました。

日本財団、日本科学協会は大変教育・研究図書有効活用プロジェクトを重視し、笹川理事長は常に中国の受贈大学を訪れました。この度は、第三回中国大学図書館担当者訪日団の訪問中に、日本財団の曽野会長、笹川理事長が訪日団を親切に接見しただけではなく、全体の団員たちに署名した図書を寄贈しました。日本科学協会濱田理事長は訪日団の到着日の夜及び帰国の前夜にも訪日団を招待し、訪問団員に書いた著作を寄贈し、わざわざ訪日団の見学のために東京から山梨県へ赴きました。梶原常務理事はわざわざ空港まで訪日団を出迎え、歓迎会、送別会に出席し、訪日団と同行して山種倉庫、雪印乳業横浜工場及び横浜

市などを見学しました。坂下総務部長は 2 日間訪日団と同行し、送別会にも出席しました。佐々木文君課長及び他のプロジェクト関係者は訪日団の滞在日程をよく手配しましたとともに、入国から帰国まで訪日団と同行しました。訪日団は日本科学協会創立 80 周年記念式典に出席する招聘をうけたではなく、中国医科大学副学長、図書館長何欽成教授は宴会の前に挨拶しました。日本科学協会は中国大学への図書寄贈プロジェクトを重視すること及び中国人民に対する友好情誼は現れ、訪日団の全体団員は深く感心されました。

訪日団は日本科学協会創立 80 周年記念式典に色々な日本科学協会の理事たち、評議員たち及び図書寄贈プロジェクトの協力者と会いました。みんなも図書寄贈プロジェクトの実績を注目しました。図書寄贈協力機関の山種倉庫を見学したときに、全体団員は図書処理現場の働く雰囲気を体験し、日本科学協会及びその協力者は図書寄贈プロジェクトに表現した働き熱情、真面目な態度、勤勉な労働に最高な敬意を表れました。たくさんの団員は時々に寄贈図書を良く管理し続け、寄贈図書の最大な役目を果たせ、自分の大学の教育事業を促進し、日本科学協会の友達たちの良好な願望及び苦しい努力は実現できることを決心しました。一部の団員も図書寄贈プロジェクトが日本から中国大学までの一方援助を中日両方の図書情報交流と利用の互助に変化するために努力しようと思います。

2. 日本図書館管理とサービスからの啓発

訪日団は三種類の図書館を見学し、三つの図書館のサービス内容、利用者団体、館内施設が違いですが、訪日団員はこのような図書館の管理とサービスの特色から啓発を受け、深い印象があります。

(1) 日本中央政府、地方政府、大学も図書館が国民教育中に働く作用を重視し、図書館の発展をよく支持します。例えば、国立国会図書館館長は国務大臣のレベルで、運営経費はすべて国家に払われ、2002 年度、2003 年度の予算はべつべつ 262.7、238.8 億円でした。立川市立図書館の 2004 年度予算は 13.7 億円、市予算総額の 2.4%を占めました。国際基督教大学図書館の 2004 年度予算は 1.7 億円、学生平均は 5.3 万円です。このような財政予算は発達途上国の中国に対してどうしても難しいと思います。

(2) 図書館の管理手段と施設が先進です。各図書館もコンピューターを利用し図書の貸出、返却、収蔵を管理し、電子図書、マイクロフィルム、磁気ディスク、ビデオカセットを読む施設が十分で、書庫は広い、垂直・水平のコンベアなどが設置され、貸出、検索が便利です。特別に、訪日団員は国際基督教大学図書館の自動化書庫に大変趣味があります。

(3) 情報処理と利用におけるネットワーク化、デジタル化、資源共有を重視します。例えば、国立国会図書館が貴重書画像データベース、近代デジタルライブラリー、日本語図書データ、新聞雑誌データ、ジャーナル論文索引、アジア言葉資料目録などを開発しました。日本大学図書館ネットワークセンターには国立情報研究所が供えた

NACSIS-CAT 情報システム、東京大学図書館が作成した Pottal Site がありますが、各大学図書館も Web site に e-learning があります。

(4) 利用者に対するを人間化のサービスです。各図書館には、庁舎がきれい、貸出、検索が便利、多言語の図書館案内、指南があります。視覚障害者、子供にできるだけ完備のサービスを供えます。このようなサービスは図書館の利用率を高めます。例えば、国立国会図書館の毎日平均来館者が 2600 人、立川市立図書館は 2003 年度に平均的に一名の市民に貸出した図書が 8.82 冊、約 46%の市民が図書館で登録し、国際基督教大学図書館の毎日平均利用者は 1357 人、約学生の半数を占めます。

3. 短い訪問、深い印象

訪日団の大部の団員がはじめて訪日し、このたびのスケジュールが短いですが、団員たちは深い印象があります。民族歴史と伝統文化を注目し継続することから自然景色と生活環境を保護し飾りますことまで、東京の現代的な都市地下鉄システムから田舎にもある道路まで、国民が規則を守る意識及び社会高徳意識からどの社会にもある新聞に毎日報道する刑事犯罪事件まで、森林、温泉、田舎の静か、綺麗、温かさから都市部の繁華、にぎやか、煩さまで、親しい中華街と中華料理から独特な日本料理とカラオケまで、あちこちに見える高技術電子製品から極めて精緻な日本伝統工芸まで、訪日団員は新鮮な忘れない記憶を心に残っています。訪日団が訪問より日本人民が平和を渇望し、中国人民と世代友好を発展する希望を了解したことは最も大切な収穫だと思います。

8 日間の訪問が短いですが、訪日団の全体団員がこの度の訪問より、さらに教育・研究図書有効活用事業を促進し、中日両国間の世代友好を発展し、世界の平和と発展を促進する人間の共同的な願望を実現できることを信じます。

二〇〇五年二月二十日

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

美しい日本 ―訪日感想:4つのテーマについて―

黒龍江大学 図書館館長・教授 楊 慶辰

2005 年 1 月 17 日、ホストである財団法人日本科学協会の招請を受け、一衣帯水の隣国―美しい日本に到着し、7日間に亘る訪問が始まった。

訪日の期間は非常に短く、その上、日本社会の速いテンポに合わせたハードなスケジュールであったため、馬を走らせて花を見るような感じだったが、日本の社会現象や日本の自然を自らの目で確かめることができた。また、日本科学協会の皆様との交流を通して、彼らの仕事に対する熱心さや勤勉さに触れることができ、彼らに対する敬意と様々な感慨が心に生まれた。

テーマ 1 ―文化交流―

中日間の文化交流は、正に「源も遠ければ流れも長くなる」という喩えのように、中国の秦漢時代から始まり、唐の時代になると非常に盛んになってきた。その時期、日本からは留学生、留学僧が中国に渡り、中国からは鑑真和尚が日本へ渡った。それと同時に書籍交流の歴史も始まった。日本の僧侶遍照金剛の著書『文鏡秘府論』には、中国本土では流失しまっていた詩や文学作品が収められている。明の万歴時代、中国本土には『金瓶梅詞話』が一部分しか存在しなかったが、日本にはそれ以上の部分が存在していた。そして、清末から民国初年にかけて書籍交流の規模はますます拡大していった。学者楊守敬の著者『日本訪出記』、董康有の著者『書庸潭』には、彼らが日本で収集した中国の古籍の成果が記載されている。康有為が編纂した大著『日本図書志』を通して日本の書籍は中国に紹介された。こうした双方向の交流は中日両国にとって非常に有益なことであり、両国のそれぞれの文化をさらに豊かなものにした。

日本科学協会は、1924 年の創立以来、日本国内外における科学・技術の交流促進を旨とし、世界平和への貢献を目的としてきた。日本科学協会の主な事業内容の一つとして、日本の企業、大学、研究機関、出版社等から図書を収集し、その内容・部門・分野に応じて分類・整理のうえ、海外の関係大学に寄贈するという「教育・研究用図書の有効活用事業」がある。この事業を通じて教育と学術研究の促進、さらに相互理解と友好交流の増進に貢献するというものである。黒龍江大学は中国における当初からの寄贈対象大学である。日本科学協会との交流はその時から始まっており、現在まで長い付き合いとなっている。長年に亘る交流の中で、日本科学協会の「教育・研究図書の有効活用事業」の重要さ、協会担当者の責任感の強さ・真剣さ・勤勉さ・弛まぬ努力をしみじみと感じている。そのため、笹川陽平日本財団理事長、濱田隆士(日本科学協会)理事長、梶原義明(日本科学協会)常務理事も実際、度々訪中している。黒龍江大学を訪問した際、寄贈図書の管理と活用状況を詳しく視察した。ここで特筆しなければならないのは、当事業の担当者顧文君女士が苦労も厭わず中日両国間を行き来し、細心かつ周到な心遣いをもって実務を処理しているということである。顧文君女士は、日本から電話や FAX や E-Mail を通じて寄贈図書についての具体的な指示を寄贈対象大学に伝えるという、この大変煩雑な業務をスムーズに進めている。

今回の訪日においても、日本科学協会の仕事に対する責任感の強さと勤勉さについて深

い感銘を受けた。笹川陽平日本財団理事長、曽野綾子日本財団会長、濱田隆士(日本科学協会)理事長等の責任者は、第 3 回中国大学図書館担当者訪日団全員と会見し、交流を行った。濱田隆士理事長は、高齢にも関わらず、自ら歓迎会と送別会を主催し、箱根(山梨)まで同行してくれた。日本滞在中にわれわれは日本科学協会「創立80周年記念式典」に出席した。こうした様々な活動を通じて、日本科学協会が中国への「教育・研究図書の有効活用事業」を非常に重視していることがよく分かった。我々の訪日中、顧文君女士は体調が芳しくなかったにも拘らず、また、家庭や子供があるにも拘わらず、終始一貫我々の面倒を見てくれた。彼女の非常に細心かつ周到な手配のお陰で、我々の訪日は思い残すこともなく実り豊かなものになった。彼女の仕事振りを通して、日本科学協会全職員の仕事に対する厳格さ、真剣さ、そして、少しも疎かにしない仕事の態度を実感することができた。

今回の日本訪問を通して「教育研究図書の有効活用事業」のプロセス全体に対する理解が深められた。日本財団の助成を受け、日本科学協会は、図書の提供者から図書を収集し、収集した図書を保管すると共に整理、選別し、寄贈対象大学へと送付する。その間、日本科学協会には、寄贈対象大学との間で連絡や情報交換という煩雑なコミュニケーションのプロセスが存在する。中日間の文化交流のため、経済的な負担の外に日本科学協会の職員達は多大なる精力を費やし、大変な肉体労働をしなければならない。彼らの仕事振りに深く感動させられた。受贈対象大学としてこれらの図書をきちんと整理し、良く管理しなければならない。丁寧に検索・索引を製作し、これらの図書が中国の学生達に充分に活用されるよう努力していきたいと思っている。

テーマ2 ― 日本の図書館―

第 3 回中国大学図書館担当者訪日団全員は中国の大学図書館の担当者であり、団員の多くは図書館館長である。このようなメンバー構成を考慮して、受入側は日程を組んでくれた。「日本の大学図書館の現状」というテーマの講義を聴いたほか、ほぼ毎日図書館を見学した。国立国会図書館、立川市立中央図書館、国際基督教大学図書館を見学した。これらの図書館の見学を通して、私個人として最も深い感銘を受けたことが2つあった。1 つは図書館の自動化管理が進展状況であり、もう1つは利用者本位という図書館の管理理念である。

前者については、例えば、国際基督教大学図書館では、パソコンに本のタイトルを入力すれば、本の入った籠が目前にやって来るというシステムである。籠には識別用のタグが付いており、希望の本が迅速に取り出すことができるという非常に便利なシステムなのである。団員は皆、そうしたシステムを興味津々見学しながら、自分の大学の図書館にも今後導入しなければならないと議論した。

後者については、立川市立図書館内の幼児向けの図書コーナーを見た際の感想である。幼児図書のコーナーは学齢前の子供達のための図書の展示コーナーである。幼い利用者達は本棚からそれぞれの年齢層に合った本を自由に取り出し、小さな椅子に腰掛けたり絨毯に

座ったりして読むことができる。そして、本のほかにも様々な玩具が用意されている。子供達は遊びながら本を読み、遊びの中から知識を吸収するのである。こうした教育は幼児の特徴を考慮したものであり、様々な利用者にサービスを提供するという利用者本位の理念にもとづくものである。また、子供の読書を重視する手法は非常に参考になった。

テーマ3 —礼儀の国—

日本民族には多くの優れている点がある。しかし、数日間という短い滞在期間ではこれらの優れている点の全てを理解することが不可能である。このほんの数日の間に理解できたことはわずかである。しかし、わずかな理解とは言え、人生の悟りに繋がる理解でもあった。例えば、至るところで日本人の親切さを感じることができた。理事長から一般の職員まで、日本科学協会の全員が心を尽くして我々に接してくれ、その友好的な感情と温かさが充分に伝わってきた。全般的に日本人は非常に礼儀正しい。日本中が礼儀の国と言うことができる。日本人は規則を守り、日本社会には秩序がある。人が並べば、自動的に列を作って順番を待つようになる。決して割り込みをすることなどはない。公共の場において、傍若無人に大声で騒ぐこともない。これらの良いところは中国人が見習わなければならないところである。

日本の生活様式、飲食習慣もとても好ましく感じる。箱根（山梨）で宿泊した和式の部屋や室内の調度品は非常に簡素で実用的であり、広々として清潔な感じがした。これは最も合理的な居住環境だと思った。溢れるほどの物を豪華に部屋の中に陳列し、手足が充分に伸ばせないような居住環境より、このような和室の方が余程住み心地が良いと思った。そして、日本料理もさっぱりとしていて非常に美味しく感じられた。特に、食欲をそそる沢庵と梅干は、肉料理よりあっさりしていて人生の楽しみを極める食の味だと思うほど美味しかった。

テーマ4 —美しい自然の景観—

以前、日本の自然の美しさについては、川端康成や（東山魁夷）の散文の世界から得られた知識のみであった。しかし、それらはあくまでも紙から得られた印象に過ぎなかった。今回、実感することができた日本の自然は紙からのものより更に鮮烈なものであった。かの有名な川端康成のノーベル文学賞受賞式での演説「美しい日本の私」では、古代日本の僧侶良寛の「草庵に住み、粗衣を着、田舎の小道を歩き、子供達と遊び、農家と世間話をする」と憧れの境地を描写している。このような境地は、東京のような現代的な大都市にはもはや見られないものだと思っていたが、そうではなかった。国際基督教大学の泰山荘の丘と林と隣接した草庵を散策したが、降り積もった落ち葉で覆われた小道を歩いた時の感覚は正に自然そのものであり、高価な絨毯を踏んで歩く感覚よりずっと気持ちが良かった。

日本という国の象徴、そして日本国民には神聖な意味を持つ山—富士山は厳かで純白で輝かしく、泰然として聳え立ち、麓の全て—歴史的な自然の変化、世の中の激しい変遷—を見守っている。これらの美しい自然は正に日本の文学と芸術を育み、日本の美学や趣を形成している環境である。

当然、自然の美しさは、清潔さと切り離して語れるものではない。大気汚染された富士山、或いは、山頂にゴミが堆積している富士山を想像してごらんなさい。眺める気もなくなるだろう。

日本科学協会の「教育・研究図書の有効活用事業」が今後も継続され、さらに成果の上がる事業に発展するよう期待している。

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

牡丹江医学院図書館館長　李　鷹

中国の伝統的な祭日——旧正月を過ごした後間もなく、第 3 回中国大学図書館担当者訪日団の一員として日本を訪問した。旧正月の気分がまだ残っていたが日本訪問の思い出はそれより遥かに濃い。このような思い出があるのは訪日の成功と日本科学協会の「教育研究用図書の有効利用事業」の成果の証である。

この場をお借りして、われわれの訪日のためにご尽力なさった日本科学協会の方々に感謝の意を表し、そして曽野綾子日本財団会長と笹川陽平日本財団理事長が訪日団と親しく会見してくれたこと、「教育研究用図書の有効利用事業」のために日本財団の素晴らしい貢献、日本の図書館界全体の現状を理解させてくれた田中功教授の素晴らしい講演、濱田隆士理事長、梶原常務理事、顧文君女史、宮内女史、南保女史が心を込めた接待や手配、華先生の周到なサービス、市川浩先生、長谷川洋先生、川井俊之先生、王韜先生が「教育研究用図書の有効利用事業」のためになされた苦労と貢献に併せて心より感謝の意を表したい。

日本滞在中に、日本科学協会の周到な手配により日本国立国会図書館、国際基督教大学図書館、立川市立図書館等日本における代表的な図書館を見学した。これらの図書館の見学を通じて日本の国民資質の向上や科学技術の急速な発展における図書館が果たされた役割を感受した。そして日本の図書館の建設における資金投入や科学的管理やサービスの理念や仕事に真剣に取り込む精神等は非常に参考になった。

それ以外に、日本の風土人情や日本国民の友情に触れ合う機会があった。壮美な富士山、人情が溢れる彫刻の森美術館、仙境のような大涌谷、幸運を招く温泉、世界に名を馳せるディズランド、これらすべてが日本訪問の良い思い出となり、生涯に忘れがたいものとなった。

これらの思い出を胸に、中日両国の国民の世々代々の友好と「教育研究用図書の有効利用事業」の健康的発展を祈念して止まない。

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

黒龍江東方学院図書館　李継凡

2005 年 1 月 17 日～24 日に第 3 回中国大学図書館担当者訪日団の一員として日本を一週間訪問した。

今回の訪日は日本科学協会の招請によって実現したものである。訪日団は中国大学図書館担当者 16 名と中国国際友好連絡会 1 名の計 17 名から構成される。団長は、何中国医科大学副学長が務め、秘書長は中国国際友好連絡会馬農処長が務めた。第 1 回笹川杯日本知識クイズ大会優勝者訪日団(7 名、うち学生が 5 名)も一緒に訪日し、行動を共にした。

1.　寄贈事業は大変苦労なされるがいまの苦労（「功」）は将来必ず実る

今回の訪日を通じて日本科学協会のことについてより深く理解した。

1924 年に日本科学協会は設立した。日本到着の翌日に日本科学協会創立 80 周年記念大会が開催された。われわれも招請を受けて記念大会に出席した。日本科学協会の宗旨は、国内と海外の科学者、技術者及び科学と技術の発展に関心を持つ人々の友好と協力を促進し、科学研究を奨励するために助成金を提供して科学教育と一般文化事業の発展を促進することである。日本科学協会の国際協力事業の一環として 1999 年 7 月から「教育研究用図書の有効利用事業」をスタートした。

日本滞在中、「教育研究用図書の有効利用プロジェクト室」の担当者全員に会うことができた。課長を含めて 4 人しかいないが大量の作業をこなしている。例えば書目リストの作成と郵送業務だけでも大変時間がかかり、難作業である。担当者達は実に寄贈対象 17 大学の学科設置について非常に詳しい。対象大学の学科に合致する図書リストを送り、効率は非常に高い。黒龍江東方学院には年間 220 通以上のE-mail や5回の海運図書が送られてくる。われわれは興味津津に図書の整理、分類、梱包、発送をまとめて処理する場所――日本科学協会の倉庫を見学した。倉庫に入ってまず目に入ったのは自分の大学名が書かれているダンボールである。思わずみんなが歓声をあげた。自分の大学名が入っているダンボールと一緒に写真に収めた。日本科学協会は、研究機関、企業、大学、出版社等から寄贈された和文と英文の図書を倉庫に集めてスタッフ達は日本科学協会の寄贈リストに従って図書を梱包して港に運送し、船で中国の港まで運送する。現在までに中国の 17 大学に延 110 万冊以上の図書を寄贈した。黒竜江東方学院は 5 万冊を受贈した。これらの寄贈図書は非常に有用なものであり、利用者数が多い。卒業生は卒論作成のために多いに役に立っているため、利用者には卒業生の利用率が一番高い。「知識を豊かにし、日本の社会と文化を理解した」「日本の食と文化をより深く理解した。これらの書籍が好きだ」と学生達からの評価が高い。長期の視点から見ればこれらの図書は保存価値があり、教育と研究に非常に有意義な

ものである。

2．目標は同じく、それぞれの特色があり、他人の長所で自らの短所を補う。

訪日中に四つの図書館を見学した。

利用者の必要を満足させ、読者が満足するサービスを目指して、科学技術と社会の発展、国民資質の向上への貢献は、図書館担当者として生涯の目標であり、努力を止まない唯一の目標である。この目標への追及には国境がない。但し、違う国の背景によりそれぞれの特徴がある。中日両国は一衣帯水の隣国ではあるが、社会、文化、地理等の環境が異なるため、図書館の建設や運営管理においてもそれぞれの違いを生じるのも当然である。

日本国立国会図書館は国家図書館である。蔵書は 800 万冊があり、建物面積が 14 万平米である（新館は地上4階、地下8階）。関西分館の建物面積は5万平米である。図書館施設は非常にすばらしいもので温度と湿度がいつも一定に維持している。文献は国会議員以外に貸出をせず、館内での閲覧に限定している。

立川市立図書館は、地方の公共図書館において運営状況の良い図書館であり、日本 700 市の総合力番付において第二位に並んでいる。立川市立図書館は 1 キロ半径内に1分館を目標にしている。立川市立図書館は 35 万冊で一回の貸出は 5 冊であり、期間は2週間である。

日本の大学は、出生人口数の低下という特殊な歴史時期にある。1999 年から 2004 年の 5 年間に学生数が 0.7%減少したのに対して大学数は 10%近く増加した。図書館は大学新設時の審査要件であるため非常に重要視されている。その理由もあり、日本大学の図書館は早いテンポで建設されている。われわれは比較的に古い歴史がある二つの大学図書館を見学した。

国際基督教大学は 1947 年に設立した。現在在校生が 3100 人で6学部がある。大学の校庭には緑が多い。図書館には蔵書が 60 万冊あり、うち 20 万冊は新館の自動書庫に入っている。自動書庫は、人力と空間を節約するための設計になっている。自動書庫には人間が介入せず、図書の取出と返却はすべて自動に処理している。自動書庫内の図書はダンボール単位になっている。利用者は画面から所要図書を検索して画面をクリックすれば、該当図書が入っているダンボールは自動的に貸出口に運ばれ、ダンボールから本を取り出して利用者に貸出することができる。学生に対する貸出期間は 2 週間で何冊でも借りられる。一般図書の返却遅延に対して 1 日 10 円の罰金を課されるが人気本に対しては 1 日 300 円を課される。

早稲田大学の歴史は 1882 年に遡ることができる。現在在校生は 4 万人ある。図書館の建物面積は 3 万平米で、蔵書は 200 万冊があり、日本の大学において最大の図書館である。デジタル文献は非常に豊富である。管理システムはアメリカの INNOPAC を利用し、非常に機能のいいシステムである。学生に対する貸出は 1 回 10 冊で期間は 1 ヶ月である。返却遅延の場合は罰金がないが、数回も違約し、不良記録が一定になると退学を勧告される恐れがある。

二大学は共に私立大学であり、日本国内と世界に影響力のある大学である。二大学の図書館は文献資源の構成においては種類と語学分類を重視し、1 種類の図書は 1 冊しか購入しな

い。複本もない。特殊な例以外に2冊を買わない。なお二大学には外国語の文献の比率が大きく、利用率も高い。そして二大学ともデーターベースの文献が多く利用率も高い。

訪問を通じて感じたのは、中日両国の図書館が共に国際化の流れに従っていることである。図書館の建設と運営管理において似ているところもあり、違うところもある。日本の大学の図書館は施設等ハード面や E-ラーニング、地域へのサービス、家具様式の更新などにおいて特色があり、特に自動書庫は最も光らせているところであり、良いヒントを与えてくれた。

3. 科学的な日程手配と親切な接待により友情が増進され、招請側に感謝

訪日中に、日本財団はわれわれのために盛大な歓迎会を催してくれた。曽野綾子日本財団会長と笹川陽平日本財団理事長は歓迎会で挨拶された。そして到着当日の夜、濱田隆士日本科学協会理事長は歓迎宴を設け、旅の疲れを癒してくれた。帰国前日の夜に送別会を催してくれた。梶原義明常務理事は空港の出迎えと見送りを含めて訪問の日程の大半を同行し、とても親切にしてくれた。空港でお別れの時に梶原常務理事が手を振っていた姿はいつも脳に蘇っている。顧文君課長は、毎日朝から晩まで付きっきりで、非常に親近感、暖かさを感じさせ、われわれに充実感を感じさせてくれた。坂下部長の綺麗な歌声、力強い指揮、優雅な動作から限りない魅力を感じた。宮内女史、南保女史、吉田女史はわれわれの回りの面倒をよく見てくれた。これらの場面は心に刻まれて忘れられない思い出となった。日本科学協会はわれわれの到着日を17日に設定したのは18日に日本科学協会創立80周年記念大会に出席することを配慮してくれたためである。記念大会はわれわれの訪日のクライマックスとなった。日本科学協会はわれわれの訪問日程をすきなくセットしてくれた。毎日午前も午後も日程があり、行程範囲も広い。毎日2～3時間のバスに乗らなければならない。夜8時過ぎにホテルに着いた日もあった。われわれに日本のことをより全面的に知ってもらい、日本の風土人情をすこしでも多く知ってもらうために、苺栽培ハウス、ワイン工場などの工業と農業、大涌谷火山地熱資源、リニアカー、彫刻の森美術館、ディズニーランド、そして繁華街の銀座、高層ビル林立の新宿等に案内してくれた。昼食も夕食もお気遣いいただき、いろいろな料理を味わった。日程全体は非常に科学的で合理的にセットしてくれて、細心周到、心を込めていた。すべての日程がいい思い出となり、いまも記憶に新しい。写真を取り出し、パソコンに入っているデジカメの写真を見る度にこれらの思い出が蘇って記憶は更新される。美しい場面は再現される度に感謝の気持ちが一杯になる。

今回の訪日は16大学図書館の担当者に出会いの場を提供してくれた。われわれは訪日を通して知り合い、理解しあい、情報の交流や友情の増進が出来た。西南から華東へ、東北へ、北京へ、男女老若を含めて新しいネットワークができた。このネットワークは今後も相互の事業の発展にとって有益なものであろう。

忙しい旅であり、まるで馬を走らせて花を見るよう訪日であった。不確実なところもあるが、記

憶したものを認めたのである。間違いがあればご指摘いただければ幸いである。

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

大連外国語学院 図書館 張 澤梅

日本科学協会の招請を受けて光栄にも 2005 年 1 月 17 日～24 日に第 3 回中国大学図書館担当者訪日団の一員として日本を訪問した。短い滞在だったが、日本の科学技術、文化、都市と農村の風貌、風土人情等について身をもって感受した。そして日本科学協会並びに日本の図書館界の現状及び発展についてより理性的な認識が得られ、実り豊かな訪日となった。

1. 訪日交流による「教育研究用図書の有効利用事業」への促進

日本滞在中に、第 3 回中国大学図書館担当者訪日団は、日本財団、日本科学協会の責任者やスタッフ全員から心を込めた接待と親切な接し方を受けた。笹川陽平日本財団理事長、曽野綾子日本財団会長、濱田隆士日本科学協会理事長への表敬訪問を実現し、財団法人日本科学協会創立 80 周年記念大会に出席した。そして日本科学協会の「教育研究用図書の有効利用事業」の作業現場を視察した。これらの日程を通じて日本科学協会の「教育研究用図書の有効利用事業」への重視度を体験し、日本科学協会のスタッフ達が仕事に打ち込む姿勢を感受した。交流の中に濱田隆士日本科学協会理事長が言われたように、日本科学協会は、国内と海外の科学技術者の友好交流を促進することを宗旨とし、科学技術教育と一般文化事業の発展と世界平和への貢献を目的にしている。日本科学協会が 1999 年 7 月に「教育研究用図書の有効利用事業」の実施を立ち上げて以来、中国の大学に延 120 万冊以上の和文図書を寄贈した。今回の訪問と視察を通じて寄贈対象大学の図書館担当者として今後これらの和文寄贈図書を大切にし、これらの図書を更に役に立つよう努力して参りたい気持ちが一杯である。

2. 訪日活動による中日両国人民の相互理解と友情増進への促進

日本科学協会は、中国の大学に図書を寄贈する民間交流事業を通じて中日間の友好関係の発展を促進している。世界の平和と発展を促進する中において助力剤という役割を果たしている。日本科学協会のスタッフ達の仕事に対する周到で細心でかつ厳格な姿勢、そしてわれわれに対する礼儀正しいおもてなしを通じてわれわれ訪日団全員は中日両国人民の友

好感情を感受した。今回の訪日を通じて日本財団と日本科学協会の責任者のわれわれの訪日に対する期待も感じていた。それは、中日両国が文化交流を通じて理解と友情を深め、図書寄贈をきっかけとして人員の交流へと広げていくことである。今回の訪日を通じて訪日団全員がさまざまな角度から日本の文化を理解し、友情の増進という目的を実現した。

3. 日本の図書館界との交流

日本滞在中に、われわれは早稲田大学図書館、国際基督教大学図書館、国立国会図書館、市川市立中央図書館を見学した。これらの図書館館舎に対する実地視察、図書館についての紹介、特に田中功教授の「日本大学図書館の現状」という報告を通じて日本の大学図書館についての理解を深め、中国の大学図書館と比較して日本の図書館の自動化水準と社会への図書館サービスの提供の2点について最も印象が強かった。

国際基督教大学図書館の自動検索システムは 50 万冊の蔵書をアクセスすることができる。コンピュータで制御されているロボットは、閉架図書を書庫から取り出したり、返したりしている。このシステムの存在によって図書の保存空間を多いに節約し、図書館員の体力労働を低減した。このような自動化検索システムは中国にはまだ例がない。

日本の大学図書館は一般社会や他大学の読者に対するサービスも提供している。この公共サービスの提供により大学図書館を大学や周辺住民の情報センターとしての役割を果たしている。このような位置づけはわれわれの良い参考と良いヒントになっている。

4. 日本の民俗と食文化を体験

日本科学協会の細心な手配により今回の訪日日程において、雪印乳業横浜工場、箱根美術館、リニアカー試験場等を見学することができた。大涌谷、富士山という素晴らしい景色に触れ合うことができた。そして大自然からの賜りものの温泉に浸かり、ディズニーランドを思う存分楽しんでいた。日本料理を味わい、宿泊ホテルから東京繁華街の夜景を満喫した。日本科学協会の心を込めた手配に感謝する。

われわれの大多数は日本の国土にはじめて足を踏み入れたものである。短い滞在であったが、日本民族の風土人情についてより深く理解した。そして日本国民の環境意識、公共施設における「人間本位」の具現を体験した。日本の公共施設における「人間本位」の具現についてはすこし触れておきたい。日本の土を踏み入れた時点から身の不自由の方のための黄色い点字ブロックが目に入り、そして滞在中に終始目の前にあった。目の見える場所に道さえあれば黄色い点字ブロックがある。目の見えない場所であれば、黄色い点字ブロックはずって遠くまで続いていく。日本においては目の不自由の方は社会から庇われていると感じていた。そして日本の公共トイレの女性化粧室には必ず比較的広い場所にキャラクターが付いているオムツ替えのための椅子がある。決して値段の高いものではないが子連れの母親にとって非常に便利なものである。この細心な配慮、そしてその中から反映される人間同士の互助と心の触れ

合いに感動させられた。人間本位というサービス理念は、人性という美徳の表現であり、大衆サービスという公共福祉事業は、このように「人間本位」を具現しなければならない。社会福祉事業は経済力に支えられるものではあるが、「人間本位」の理念、そしてその心は経済力に制約される

東京という大都会は、そのリズムが速く、東京に生活している人々のリズムも速く、休まずに大都会のリズムを更に速めていく。この速いテンポの中において、日本科学協会の事業も必ず輝しい未来がある。われわれも中国における対日交流の前衛——中国大学図書館の担当者として、未来へ充分な自信を持っている。中日両国民が手を携え、日本科学協会とわれわれの共同努力を通じて「教育研究用図書の有効利用事業」は美しい未来があると信じている。

「第3回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

遼寧師範大学　図書館　唐　先輝

2005年1月17日～24日に、第3回中国大学図書館担当者訪日団と共に日本を訪問した。滞在期間が短かったが、日本科学協会の細心な手配によりさまざまな活動に参加し、日本の特色があるところを見学することが出来た。これらの視察と見学を通じて短い訪問期間において日本社会の政治、経済、文化並び日本人の日常生活等を大体理解することができた。

日本国立国会図書館、国際基督教大学、立川市立図書館、早稲田大学図書館等の図書館を視察した。これらの図書館には国家図書館(日本国立国会図書館)や公共図書館(立川市立図書館)があり、われわれの大学図書館と似たような大学図書館(国際基督教大学図書館と早稲田大学図書館)がある。日本国立国会図書館は非常に秩序があり、整然としている。立川市立図書館が読者へのサービスにさまざまな工夫をされている。国際基督教大学図書館の自動検索貸出システム、早稲田大学図書館の学術雰囲気等は非常に深い印象を残してくれた。日本の図書館の管理方法、管理理念、サービスの方式と手段等は今後われわれにヒントを与えてくれた。日本科学協会の手配により日本女子大学文学部教授田中功教授の「日本の大学図書館の現状」という報告会に参加し、日本の図書館情報学の専門家とたっぷり交流ができた。報告会を通じて日本の図書館事業についてはより深く理解することができた。われわれは寄贈図書の整理、加工等の作業現場を視察し、われわれの図書館に到着するまでの図書寄贈の全プロセスを確かめた。日本科学協会のスタッフ達は、「教育研究用図書の有効利用

事業」のために多大な努力と肉体労働をなされたことをよく分かった。

今年は日本科学協会創立 80 周年という節目の年であるため、われわれは幸運にも招待客として日本科学協会創立 80 周年記念大会に出席した。記念パーティーにおいて日本各界の方々と充分な交流ができた。

今回の訪日は実り豊かなものとなり、決して無駄足ではなかった。

日本科学協会、特に顧文君先生がわれわれの訪日のためにご尽力いただいたことに対してここであわせて衷心より感謝の意を表したい。

2005 年 3 月

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

大連医科大学　図書館　王　虹菲

日本科学協会の招請を受け、光栄にも 2005 年 1 月 17 日～24 日に第 3 回中国大学図書館担当者訪日団の一員として日本を訪問することができた。8日間の交流と視察を通じて日本の財団法人や日本科学協会のことを全面的な理解ができた。そして「教育研究用図書の有効利用事業」の運営方式についてより直観的でかつ感性的な理解が得られた。特に日本の大学図書館と国立図書館及び公共図書館の現状について一定の理解ができた。更にその他の見学を通じて日本の科学技術、文化、都市と農村の状況、風土人情等を切実に体感した。8日間の日本の旅は実り豊かなものとなった。

1. 交流を通じて日本科学協会及び「教育研究用図書の有効利用事業」についてより深く理解した

日本滞在中に第 3 回中国大学図書館担当者訪日団は、日本財団、日本科学協会の責任者並びにスタッフの方々から熱烈でかつ親切な歓迎を受けた。光栄にも笹川陽平日本財団理事長、曽野綾子日本財団会長、濱田隆士日本科学協会理事長への表敬訪問を実現できた。そして日本科学協会創立80周年記念大会に出席した。日本科学協会の「教育研究用図書の有効利用事業」の作業現場を視察した。これらのすべての日程を通じて日本科学協会の「教育研究用図書の有効利用事業」への重視、並びに日本科学協会の担当者達が仕事に対する責任感を感じた。濱田隆士理事長は語ったように、日本科学協会は国内と海外の科学技術者の友好協力、そして科学教育と一般文化事業の発展の促進を宗旨とし、世界平和へ貢献することを目的としている。1999 年 7 月に日本科学協会は「教育研究用図書の有効利用事業」をスタートして以来、中国の大学に延 120 冊の日本語版の図書を寄贈したと聞いた。今回の訪日

を通じて「教育研究用図書の有効利用事業」の寄贈対象大学図書館の担当者としてこれらの日本語版の図書を大切にし、これらの図書をより大きい役割を果たすよう一層努力して参りたいと切に思っている。

2. 日本の図書館界との交流を通じて日本の各種類の図書館について一定の理解ができた

日本訪問中に、早稲田大学図書館、国際基督教大学図書館、国立国会図書館、立川市立中央図書館を訪問した。これらの図書館の館舎に対する実地調査と図書館についての説明を通じて、特に田中功教授の「日本の大学図書館の現状について」の報告を聞いて日本の大学図書館についてより深く理解できた。中国国内の図書館に対して、日本の図書館の自動化レベルや社会へのサービス提供の2点が一番印象に残った。国際基督教大学図書館の自動検索システムは、50 万冊の図書にアクセスすることができる。コンピューターで制御するロボットは、書庫から図書を取り出したり、書庫に図書を戻したりして書庫の空間を節約し、図書館員の肉体労働を低減した。このようなシステムは中国国内にはまだ例がない。日本の大学図書館は程度が異なるものの、社会の一般大衆や他の大学の読者にもサービスを提供している。社会へのサーヒースの提供は大学図書館を「大学や地域社会の文献情報資源センター」として位置付けられている。このような位置づけはわれわれの参考とヒントになる。

日本の図書館のオープン的な管理方式は、われわれの図書館の参考にもなる。われわれの大学には新しい図書館の建設を予定しているが、日本の図書館の管理理念、レイアウトなどは非常に参考になる。

なお、日本大学図書館の E―ランニングも良いヒントを与えてくれた。われわれも日本の大学と同じように読者の図書館利用についてのトレーニングの問題がある。E―ランニングは、非常に有効な解決方法になると思う。われわれの大学図書館でこの方法を試みたい。

3. 今回の交流は中日両国民の相互理解と友好往来を促進した

日本財団と日本科学協会は、中国の大学を対象に実施している「教育研究用図書の有効利用事業」という民間交流事業を通じて中日の友好関係の発展を促進し、世界の平和と発展を促進する役割を果たしている。日本科学協会のスタッフ達の周到で細心な風格、厳格で慎む態度、礼儀正しく心を込めた接し方から中日両国民の友情をツクヅク感じた。今回の訪日でわれわれは日本財団と日本科学協会の責任者の方々のわれわれへの期待を感じた。すなわち文化交流を通じて中日両国の相互理解を増進し、友好関係を発展させること、図書の寄贈から人員の交流へと拡大することである。今回の訪日を通じて訪日団の全員が各角度から日本の文化を理解し、友好~~の~~の増進という目的を達成した。

4. 日本の民俗や食文化を体験した

日本科学協会の細心な手配により、雪印乳業横浜工場、箱根森の彫刻美術館、リニアカー試験場等を見学することができた。大涌谷、富士山を見て、大自然の賜り物の温泉に浸かり、

ディズニーランドを思う存分楽しんだ。和食も美味しかった。

訪日団の大多数の人は、日本の国土に初めて足を踏み入れたものである。数日間しかない短い滞在であったが、日本科学協会の細心な手配により日本科学協会と日本の図書館についてより多く理解しただけではなく、日本の風土人情、日本の社会、食文化についてもより深く理解した。なお日本国民の環境意識、公共施設に具現されている「人間本位」という理念等を自ら体験し、より深く理解した。特に日本の公園や空港等の公共施設に設置されている分類のゴミ箱にについて印象に残った。ゴミを捨てる前にゴミ箱に書いている分類の標識をよく見てから捨てるのである。

中国の大学は新学期が始まり、図書館の仲間達に今回の訪日の内容と自分の感想を紹介した。そして日本で撮った写真を図書館の内部サイトに公開し、みんなに鑑賞してもらうことにした。今回の日本の旅は私にとって非常に良い思い出になっている。

最後に、今回の訪日のチャンスを与えてくれた日本科学協会に感謝の意を表したい。

「第3回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

清華大学図書館　　黄　偉七

財団法人日本科学協会の招請を受け、「第3回中国大学図書館担当者訪日団」は、2005年1月17日～24日まで日本を訪問した。私は清華大学図書館の代表として訪日団に参加した。日本科学協会の周到な手配により視察活動は順調に完了した。今回の訪日を通じて中日双方の担当者の相互理解と友情は深められた。

財団法人日本科学協会は、1999年に「教育研究図書の有効活用事業」を立ち上げた。この事業は、中国の10大学の図書館を寄贈先として選んだ。中国の大学図書館担当者を日本に招請することは、この「教育研究図書の有効活用事業」の一環である。その目的は、中国の大学図書館担当者に本事業の仕組みや実施状況をより深く理解してもらい、双方の交流を通じて事業をさらに推進させることである。また、現地視察を通して中国の図書館担当者に日本の図書館事情と日本の社会や文化について理解する機会を提供することである。

日本滞在中の訪日団の主な活動内容は、日本財団と日本科学協会への表敬訪問、「日本の大学図書館の現状」というテーマのセミナーへの参加、図書館3館(公共図書館、大学図書館を含む)の視察、関連する科学技術や文化、研究機関、史跡・文化や自然景観の見学等であった。

1.「教育研究図書の有効活用事業」と中日の民間交流

日本財団と日本科学協会は、科学・教育の発展及び世界の平和促進に力を入れている。そして、「教育研究図書の有効活用事業」を非常に重視している。図書の収集、整備、配送等に非常に力を入れている。「教育研究図書の有効活用事業」を実施するに当たっては、日本の図書館、出版社、文化関係機関等、各界から多くの支援が得られた。「教育研究図書の有効活用事業」が中日友好の架け橋となっていることについて、今回の訪日で深く認識することができた。

笹川陽平日本財団理事長、曽野綾子日本財団会長は、訪日団と会見し、歓迎宴を主催した。また、日本科学協会「創立80周年記念式典」の席上、訪日団長は熱情を込めた発言により、我々訪日団全員の気持ちを伝えた。「教育研究図書の有効活用事業」に関わる者として、自らの努力により2つの民族の交流とコミュニケーションを促進することができるということは、何と素晴らしいことだろうと思う。

2. 日本の図書館についての研究

訪日スケジュールの中で、大学図書館と公共図書館を見学した。訪問と交流により、日本の図書館の概要を深く理解することができ、図書館員としての今後の仕事の参考になった。田中功日本女子大学教授の「日本の大学図書館の現状について」という講義とその後の質疑応答を通して、図書館に関する我々の理解はさらに深められた。

3. 先端的な設備と科学的な管理、「利用者本位」を具現化する日本の図書館

見学したそれぞれの図書館には、閲覧のための充分なスペースがあり、検索端末も完備しており、読者には行き届いた細心のサービスが提供されている。公共図書館は利用者の範囲が広く、サービスを提供する際、子供や障者のある方々の需要については特段の配慮がされている。図書館のサービスが、大衆の文化的素養の向上に果たす役割は重要である。立川市立中央図書館では、学齢前の子供達へのサービスを見学することができたが、とても印象的であった。子供向けに豊富な図書が提供されているばかりでなく、いろいろな種類の玩具も備えられており、図書館員が保育園の保母のように子供達の面倒を見ていた。館内の隅々まで利用者本位の精神が貫かれている。例えば、防音対策が施されているジャーナルの棚、日本語、英語、中国語、韓国語等、いろいろな国の言葉で書かれている小冊子、全面的にバリアフ

リー設計された館内施設、音声による案内や文献閲覧機器等、いろいろ配慮されている。見学の際も、利用者の感情を配慮して写真撮影禁止を規定するなど、利用者の人権が充分に尊重されていた。正に「利用者は神様」という理念を具現している。

4. 日本の文化を感受する

日本滞在中、訪日団は行く先々で温かく迎え入れられた。深くは交流できなかったが、この交流により、日本国民の友情と誠意を感受することができた。限られた視察を通じて日本国民の謹厳さと緻密な作業の姿勢を実感することができた。㈱ヤマタネの作業現場で、我が大学の図書館に配送予定の図書を見ることができた。その際、非常に親しみを感じたので、それらの図書とともに記念写真を撮った。配送センターの建物は古いものであったが、作業は秩序立てて整然と進められていた。

箱根散策の際、白雪を頂いた富士山の聳え立つような遠景を眺望することができたが、私達は神聖で厳かな気持ちで胸が一杯になった。

日本滞在の最終日には、東京ディズニーランドを遊覧した。素晴らしいメルヘンの世界に、訪問による連日の疲労は吹き飛ばされた。大人が子供と共に大パレートに参加して行進する姿はこの上もなく羨ましいものであった。

日本滞在の一週間、ローカル色豊かな和食を楽しみ、全く異なる食文化に触れることができた。財団法人日本科学協会の招請に感謝している。この訪日により、日本文化の豊かさと日本国民の友情の深さをしみじみと感じることができた。

2005年1月26日

「第3回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

南京大学図書館　劉　栄

2005 年 1 月 17 日に、飛行機は上海から東京へと飛び立った。初めての飛行機、初めての外国でやや緊張していた。飛行機が着陸した瞬間、「東京よ、私はついに来たぞ！」と心の中で叫んだ。70 年前に母が留学していた土地に自分の足を踏み入れた感激と、初めての土地への好奇心で胸が一杯だったが、多くの疑問符が頭の中で渦巻いていた。

それらの疑問符を脳裏に人々の流れに従って到着ロビーに足を踏み入れた時、「劉先生」という呼びかけに我に返った。日本科学協会の役員と女性職員の方々が、我々に向かって手を振っており、我が家に帰ったような気持ちになった。こうして生まれた新しい大家族は、東京で集結し、8日間の有意義な集団生活が始まった。

日本の地理や人文的な知識については、本で読んだり、母から聞いたり、テレビを見たりして得ていた。イメージの中の日本は経済大国であり、東京は国際的な大都会であり、繁華街であった。しかし、見学等を通じて日本の真実の姿を見ることができた。

中日両国は、古くから文化的に融合してきた。(日本人には)中国人と同じような習慣があり、同じ漢字を使用している。日本の便利な公共交通網、整然とした清潔な町、秩序のある生活、清新な空気、穏やかで落ち着いた都市、治安の良い社会環境、職責に忠実な会社員、整った服装を身にまとった礼儀正しい市民の穏やかな表情、元気で天真爛漫な小学生、世界に目を向けて勉学する大学生等は、とても印象的だった。日々増えつつある中国からの留学生、日本経済に参入するために進出している中国企業、商品の主流となっている「MADE IN CHINA」、在日の華僑の誇りと自信溢れる堂々とした表情、中国は蘇ったのである。奮って邁進し、努力を続けており、大国の風格を示している。それに対して、日本は経済大国だが、島国の精神のため、他国が強くなるのを恐れながらゆっくりと前進している。

中日両国は、切っても切れない関係にある。そのような関係の中には、両国人民の友好往来の歴史と同時に、アジア並びに両国間において忘れてはならない侵略と屈辱の歴史もある。平和な世界と調和した幸福な生活は、我々両国人民、そして世界の人民が共に追求している理想的な生活である。戦争を拒否し、友好的に付き合っていくことは、われわれの責務である。参議院の1階ホールで、日本の政治についての説明を受けた時、国会は日本政府の観点と立場を代表し、国会議事堂の中で、それぞれの時代の、幕の異なる劇を上演していたと感じた。20 世紀の 30 年代から 40 年代には、罪悪な歴史劇を、さらに、20 世紀の 70 年代から 20 世紀末には同じ場所において中日友好の喜劇を上演していた。また、21 世紀の現代には、中日友好を妨げ、アジアと世界の安定と平和を破壊し、両国人民を再び戦争に陥れようとする人がいる。我々は、日本科学協会の方々と共に、科学と教育のために力を尽くす人間である。そして、科学には国境がない。科学は人類に限りない喜びをもたらしてくれる。自然と人類について研究することはわれわれの責務であり、科学は純粋であり無私なものである。今後、世界で何が起ころうとも、科学は永遠であり、我々の友情も永遠に存在し続けるものである。

日本科学協会「創立 80 周年記念式典」では、中日両国の教育と科学分野における友好的な交流の現実を見ることができた。曽野綾子日本財団会長の挨拶、笹川陽平日本財団理事長の挨拶、日本駐在中国大使館公使参事官の挨拶、訪日団団長の挨拶は、我々が心から願っていることを代弁してくれるものであった。我々の友情が末永く続くように心から願っている。

今でも忘れられないのは、母親のように優しい曽野綾子日本財団会長、控え目で謙虚で穏和な笹川陽平日本財団理事長、父親のように慈悲深くて優しい、知性豊かな濱田理事長、活発で多才な坂下先生のことである。そして、中日友好のために尽力されている方々であり、仕

事に臨む彼らの態度には、心の底から深い尊敬の念を持った。彼らの行動は我々の訪日での任務の大きな励みとなり、我々の間には隔たりも距離感も感じられなかった。

日本の図書館に入館する度、どの図書館でも親しみが感じられ、まるで自分の図書館に入ったよう気がしていた。ある程度の期間、日本の図書館で仕事に携わることができるなら、日本の図書館館員の仕事や生活についてさらに理解を深めることができると思った。中国と日本とでは制度において違いがあるが、図書館の目的、サービスの趣旨については一致している。図書館管理の理念、方法はそれぞれ違いがあるが、日本の図書館と中国の図書館を比較し、相違点と共通点を見出し、細部まで分析することにより、日本での経験から学びとることができる。存在している相違を認識することにより、我々の図書館の改善が促進される。滞在期間が短かったため、表面を見ただけで理解は浅かったため、多くの疑問符は解決できないまま残されてしまった。本当に残念なことである。

日本での8日間では、日本の生活に融け込むことができたように感じられた。それは非常に快適で自由な生活であり、私の個性に合っていたものである。これまで受けてきた教育は、日本のそれとは全く違うものであったが、幼い頃から母の言動により日本の生活様式や人との付き合い方に染められてきた。日本の環境には全く抵抗感がなく非常に馴染んでいるように感じられた。母は「日本人」だと、私は「小日本人」だとして、常に他人には理解されなかった。その理由については、中国では今までずっと分からなかったのだが、日本に来てようやく理解することができた。この8日間、日本の生活を身近に体験してみて、自分の生活習慣、付き合い方は、中国のそれとは確かに異なっていると気付いた。しかし、それは間違いではなく、むしろ人間としての基本的なことであると感じた。

今回の訪日を通じて日本の公職員が任務に対する忠誠心、日本国民の法律意識の高さ、環境保護についての意識、人間本位による様々なサービス、生活や交通の便利さ、都市交通網を実体験することができた。健康長寿になるという日本料理を味わった。事の大小を問わず、周到で緻密に計画し、経済的に計算する日本人のやり方は、一般的な中国人から見ると、「けち」だと思われるが、私としては、現実さと倹約は非常に良い習慣だと思った。このほかにも中日両国における文化や生活様式の違いが表れてきた。

日本人の仕事に対する忠誠心がいたるところで感じられた。国家公務員、各図書館の職員、パート労働者、学生アルバイト、企業の従業員、旅行会社の運転手とガイドにしても、我々を受け入れてくれた日本科学協会の職員全員にしても、或いは窓口でサービスを提供する定年後再就職した老人にしても、日本人の１人１人が真剣に仕事し、自らの仕事に励んでいる。彼らは誰のために働いているのか。お金のためなのか。家族を養うためなのか。何らかの信念のためなのか。或いは、国のためなのか。私には知る由がない。

些細なことだが、日本人が公私を混同しないという一面を窺うことができた。ある日、濱田理事長は、山梨県のレストランでわれわれと一緒に食事するために電車とタクシーを乗り継いで駆けつけてくれたが、正式な担当者ではないため、交通費は自腹だった。我々との食事のためなら公費を使うのは当然だと思い込みがちだったが、あの有名な科学者、しかもれっきとし

た日本科学協会の理事長であるにも拘らず、「仕事ではないので、公費を使ってはいけない。日本科学協会の責任あるボスであるゆえに、原則を破ることはできない。」ということである。また、地下鉄の乗車料金の請求においても日本人の「公私分明」がよくわる。

規律と柔軟性があったからこそ、日本社会全体の秩序が保たれているのである。子供から年寄りまで一般市民の１人１人が法律を守っている。交通ルールという簡単な例を挙げてみよう。大通りから細い道まで、そして賑やかな新宿や銀座の夜にも、交差点さえがあれば、歩道があり、信号がある。人間と車両は自主的に交通ルールを守り、都市全体の秩序が維持されている。些細なことから大きなことまで、至るところで日本人の個性が見られる。日本人はルールをよく守っている一方で、線が引かれると、そこから一歩も踏み出すことはない。柔軟性が足りないのである。それに対して中国人は、何があってもまず頭を働かせ、主動的であり柔軟性がある。周知の理由により中国人は法律やルールをあまり遵守しない。近年、中国においても法制度についての教育に力を入れているので、近い将来、現状の改善が期待できる。もし、日本人の「柔軟性欠如」と中国人の「柔軟性（過多）」とが相互補完できるなら、どれほど理想的なことだろう。このような理想的な人間は恐らくどこにいても上司や周囲の人々に好かれることと思う。

訪日は無事に終了したが、これを機に我々の友情はさらに深まっていくことだろう。我々の任務は「教育研究図書の有効活用事業」に留まらず、中日両国民の友好促進という偉大な事業に貢献するということでもある。より多くの人々に中国のことを理解してもらうと同時に、日本のことも理解してもらいたい。

ここで日本について理解する機会を与えてくれた日本科学協会に対して感謝の意を表したい。そして、日本滞在中、周到な手配をしてくれ、親切にしてくださった皆様に感謝する。皆様のお陰で、今回の日本訪問ではまるで我が家にいるかのような思いをすることができた。

日本科学協会の皆様の南京大学訪問をお待ちしております。

今年中に再会できることを期待している。

2005 年 2 月 22 日

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

江南大学図書館　蒋　新

2005年1月17日～24日、光栄にも第3回中国大学図書館訪日団の一員として招請され、文化交流や視察を目的とする 8 日間の日本訪問が実現した。日本滞在中には日本財団と日本科学協会の招請を賜り、日本科学協会「創立 80 周年記念式典」に出席した。さらに、日本の国会、国立国会図書館、早稲田大学図書館、国際基督教大学図書館、立川市立図書館を視察した。また、受入（日本科学協会）側の手配により、「教育研究図書の有効活用事業」の協力業者であるヤマタネ株式会社の作業現場を訪問し、図書館担当者等との図書館情報に関する意見交換会にも参加し、さらに日本見物もできた。これらを通じて今回の訪日は実り豊かなものとなった。訪日を通じ、一衣帯水の隣国である日本と日本国民についての理解を深め、日本の図書館、とりわけ日本の大学図書館に関して客観的な印象が得られ、日本財団と日本科学協会の「教育研究図書の有効活用事業」についての理解がより一層深まった。

以下、今回の訪日について感想を幾つか述べたい。

日本は中国の隣国であり、私を含めて大多数の中国人の頭の中には「外国」という概念がある。中国と日本の間には輝かしい歴史も、悲惨な歴史もあった。訪日前に頭の中にあった「日本」に関する知識の大部分は、本や日本の映画からのもの、そして、2002 年に日本の空港を経由した時に「空から覗いたもの」だった。

人口は多いが、整然としていて、美しい環境の東京

東京は、閑静で清潔で空気が清新で秩序があり、とても 1200 万の人口を有する大都会とは思えない。建物が林立しているにもかかわらず、乱雑感が全くない。街路には歩行者の姿が余り見られず、新宿、銀座等の商業的な繁華街を訪れて、ようやく1億の人口を擁する国であるという実感が湧いてきた。

成熟した都市管理

東京の都市計画は非常に優れている。東京の中に身を置いていると、日本が成熟した先進国であるということを至る所で感じた。(中国のように)建設工事中の現場が方々にあるわけでもなく、煩わしい騒音もなく、舞い上がる埃もない。日本滞在の8日間の中で、今の時期の中国ではよく見られるような店舗の改装工事は見られず、行政が施工する工事も基本的には夜間に行われている。ある晩、飯田橋付近の道路や共同溝の工事現場で、3人の警察官(警備員？)が、通行人に注意を喚起するように声をかけてるのを見かけたが、翌朝、同じ場所には夜間工事用の雑然とした道具類はなく、工事の痕跡も全くなくなっており、とても驚かされた。東京は全体的に秩序があり、整然としている。

公共交通の発達

東京の基幹交通は非常に発達しており、住民や観光客に交通の利便性を提供している。星や碁石のように密度の高い基幹交通網は、非常に便利であるとともに迅速であり、経済的かつ省エネルギーである。こうしたことは中国の都市計画や都市管理の面で大いに参考になるのではないかと思う。中国の国情に応じ、公共交通と自家用車のどちらの発展を優先すべきかを考えなければならない。

文化と教育の発展における地方自治体の役割

立川市に関する説明によると、前年度の同市の財政予算の 14%が教育経費として計上され、そのうちの 18%が図書館経費として配分された。市当局が市民の文化面や精神面での需要を非常に重視しているということは、国や地方経済の発展が一定水準に達した結果の必然的傾向であると考える。中国の各レベルの地方政府も経済発展と同時に教育や文化事業にも着々と投資していくべきではないだろうか。

利用者本位・サービス重視の日本の大学図書館

早稲田大学図書館であれ、或いは国際基督教大学図書館であれ、利用者本位ということを図書館運営における重要な理念としている。読者に提供する図書館サービスについては、その質を追求する半面、図書館の建物や蔵書については、その規模と派手さを追求しない。その代わりに大学図書館の任務と使命を基本に様々なサービスを提供していることについては、参考になった。

両国民の相互理解を促進する図書寄贈事業は意義深い

訪日を通じて、日本財団や日本科学協会の熱意と友情に深い感銘を受けた。日本滞在中、受入側の担当者達の周到な手配や細心の配慮に訪日団全員は胸を打たれ、日本の友人の友情を深く感じることができた。送別会において、濱田日本科学協会理事長から「我々は科学を推進する人間であり、政局に拘わらずこれまで通り『教育研究図書の有効活用事業』を推進し続けていくし、この事業をさらに良いものにしたいと考えている。」との言葉があったが、私もこのことに強く賛同している。

8日という期間は短いものの、8日間に経験したことには一生をかけて噛み締めていかなければならないものがある。これを機に深められた理解と協力が中日の友好の架け橋となり、両国民が子々孫々友好を育んでいくことを切に願っている。

「第3回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

上海交通大学図書館　 陳 夏根

1． 訪日日程(2005年1月17日～1月24日)

1月17日　 MU523にて上海(9:05)から東京(12:50)へ

他のメンバーと成田空港にて合流後、日中友好会館――後楽賓館に到着。

夜、濱田理事長が歓迎宴を主催。

1月18日　 午前、日本の参議院、国会議事堂見学。

昼、曽野綾子日本財団会長、笹川陽平日本財団理事長へ表敬。

午後、国立国会図書館見学。

夜、日本科学協会「創立80周年記念式典」へ出席。

1月19日　 国際基督教大学、立川市立図書館、新宿の商業街を視察。

1月20日　 ㈱ヤマタネ、雪印乳業㈱横浜チーズ工場、横浜中華街を見学。

1月21日　 苺栽培園、ワイン展示販売所――日本の農業と産業を見学、日本式の温泉体験。

1月22日　 富士山の遠景を眺望しながら箱根大涌谷を見物。秋葉原電気街を視察。

1月23日　 東京ディズニーランドを遊覧。濱田理事長主催の送別会に出席。

1月24日　 MU524にて東京(13:50)から上海(16:00)へ

2． 訪日の感想

（1） 日本の印象

政治的、歴史的なことはさておき、日本という国は偉大な国であり、日本人は活気があり向上心のある民族であり、勤勉で倹しく友好的な民族であると思う。戦後から今日への発展があるのは、日本という国が人間本位を尊重し、生産力を向上させてきた結果である。

日本人は非常に高い資質を持った国民である。自分の責務に忠実であり、礼儀正しい。JR に始めて乗って人に道を尋ねたが、この時、日本人の親切さを実感として感じることができた。その日は、新宿から飯田橋へ帰る途中で、通りがかりの2人の若者に道を尋ねたのだが、彼らは道を教えてくれただけではなく、親切にも駅まで連れて行ってくれ、本当に感動した。

日本社会は非常に秩序がある。一番驚かされたのは、成田空港で時間を待ちながら休憩していた時、荷物を放置しておいても問題がなかったことである。こうしたことはホテルにおいても同様であり、安心してロビーに荷物を預けることができた。日本滞在中に警察官を見かけることは殆どなかった。交通に秩序があり、皆が交通ルールを守り、車は無理に他の車線に進入したりせず、各自が

ルールを守って運転している。夜間、車の往来がなくても、赤信号になれば、歩行者は信号を無視して道を横断することはない。中国で見かけるような交通秩序を維持するための監視者は見かけられなかった。

東京は、人口 1200 万人を有する国際都市である。この巨大都市の環境を維持することは容易いことではないはずであるのにも拘らず、東京都内の空気は新鮮で中国の山奥に身を置いているような感じがした。東京は衛生環境の良い都市である。8日間の滞在中に靴を磨いたことはなかったが、ずっとぴかぴかだった。土木工事用の車を含めて道路を走っている車は全て綺麗であった。工事現場や解体作業現場では防塵措置が取られており、これは中国にも参考になることである。

3. 図書館の印象

国立国会図書館は、日本の国家図書館である。豊富な蔵書を有し、図書館の建物自体も非常にユニークである。サービスに対する理念も成熟している。国籍を問わず誰でも無料で入館証を取得し、入館することができる。館内の設備や管理が進んでいる。国立国会図書館の財源と管理方法については非常に参考になった。

国際基督教大学図書館は非常に特色のある図書館である。この大学の自動化書庫は日本の図書館の中で最初に導入されたものということである。主な蔵書は、人文、法律、国際ビジネス関係の図書であり、利用者それぞれの需要に応じた個性化サービスについては親切さを感じる。大きさを追求せず、深さを追及し、特色ある独自の図書館建設を図っている。「より良いサービスを提供し、学生が気軽に立ち寄れる図書館」を目指している。

立川市立図書館は、公共図書館であるが、「利用者本位」の精神と市民へのサービス提供が印象的だった。

4. 日本に欠けているもの

日本という国に対しては、活気があまりなく発展が滞っているというような印象がどうしても払拭できない。現代の日本人には革新の精神が足りないように感じられる。日本人は非常に親切だが、外国人を排除する傾向も強い。若者の大半があまり英語を話せず日本語しか話せないということは、国際的な大都市というイメージとは不釣合いな感じがする。日本人はルールを守るが柔軟性に欠ける。ほかにも、日本の物価はとても受け難い高さだった。

5. 日本から学ぶべきもの

中華民族は、世界でも偉大な民族である。生産力を発展させ、総合的な国力を高めることは非常に重要である。経済が発展し、国民経済の基礎が固められれば、その他の事業を発展させる基礎も築かれるものである。

図書館事業についても同じことが言える。図書館の建物であれ、図書館の先進的な管理システムであれ、一度の投資で永遠に先進的なレベルを保てるものではなく、発展の余地についても考

慮に入れなければならない。さもなければ、さらなる発展は困難である。これは、中国の大学図書館の新館建設に当たっての非常に良いヒントとなることである。中国の重点大学の図書館は、自動化された設備等については日本に引けを取らないが、利用者本位やサービスの理念については日本に学ばなければならない。

「第3回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

寧波大学　図書館　韓　恵琴

日本財団の助成と日本科学協会の招請、そして中国国際友好連絡会の派遣により、第3回中国大学図書館担当者訪日団一行24名の一員としては、2005年1月17日～24日まで視察と交流のために訪日した。日本科学協会の周到な手配により、日本での視察と交流は順調に完了した。日本滞在期間中に日本の数種類の図書館を見学し、日本の図書情報関係の専門家及び図書館担当者と広く交流することができた。そして「教育研究図書の有効活用事業」に関わっている会社や機関を訪問し、いろいろな活動に参加した。これらの活動を通じて様々な角度から日本の科学技術や日本の文化・歴史等を理解することができた。日本科学協会や関係各界からの心を込めた歓迎を受け、行く先々で日本国民の友情をしみじみ感じることができた。

1. 訪日日程（2005年1月17日～24日）

1月17日　　MU523にて9:05上海発、12:50東京着。

他のメンバー達と成田空港で合流し、宿泊先の日中友好会館（後楽賓館）に到着。

夜、濱田日本科学協会理事長主催の歓迎宴。

1月18日　　日本の国会の参議院と国会議事堂を見学。

曽野綾子日本財団会長と笹川陽平日本財団理事長へ表敬訪問。

国立国会図書館を見学、情報交換。

日本女子大学田中教授の図書館情報学についての勉強会に出席。

夜、財団法人日本科学協会「創立80周年記念式典」に出席。

1月19日　　国際基督教大学図書館を見学し、情報交換。

立川市立中央図書館を見学。

1 月 20 日　　　早稲田大学図書館を見学し、情報交換及び業務交流。

㈱ヤマタネ鶴見倉庫「教育研究図書の有効活用事業」の図書整備・保管業務担当)を視察し、情報交換。

1 月 21 日　　　日本の産業と農業――ワイン展示販売所とイチゴ栽培場を見学。

1 月 22 日　　　富士山の遠景を望みながら箱根大涌谷を遊覧。

秋葉原を視察。

1 月 23 日　　　夜、濱田理事長が主催する送別会に出席。

1 月 24 日　　　MU524 にて 13:50 東京発、16:00 上海着。

2. 訪日の概要

(1) 日本財団、日本科学協会の「教育研究図書の有効活用事業」について

日本財団は、競艇収益の一部を海外協力支援事業に利用している。日本財団の事業の一環として中日両国の学術・文化交流を促進するために「教育研究図書の有効活用事業」を立ち上げた。日本科学協会は、財団法人として中国の 17 大学を対象に長期に亘り「教育研究図書の有効活用事業」を実施している。関係各界の努力により、寧波大学図書館は 2002 年に「教育研究図書の有効活用事業」の寄贈対象大学となり、今日までに和文、英文・欧文の図書とジャーナルが既に累計6万冊以上寄贈された。今回の「第 3 回中国大学図書館担当者訪日交流」は「教育研究図書の有効活用事業」の順調な発展を促進するために、日本科学協会からの助成(旅費は自己負担)により、同事業の実施状況等について(日本側と)意見交換等を行うというものである。

(2) 日本財団、日本科学協会の上層部へ表敬訪問

訪日中にわれわれは終始、日本財団と日本科学協会の方々から心のこもった招待を受けた。曽野綾子日本財団会長と笹川陽平日本財団理事長は、訪日団全員と直接会われた。非常に「教育研究図書の有効活用事業」を重視されている。我々訪日団全員は、「教育研究図書の有効活用事業」を通じて、中日間の民間交流、中国の大学との連携と交流、ひいては中日友好の発展が促進されるものと確信している。濱田日本科学協会理事長と梶原日本科学協会常務理事が度々われわれに同行してくれた。労苦を厭わず顧文君課長は、日本における我々の視察と見学のために行き届いた環境を作ってくれた。送別会の席上に、我々の大先輩であり著名な科学者である濱田理事長は親しみを込めて次のように語ってくれた。

「両国の政治関係が如何になろうと、文化面での違いがいくら大きかろうと、科学者としては、科学と技術には国境がないと考える。中日両国民の友好の歴史は遠い昔まで遡る。大いに交流を行い、我々の「教育研究図書の有効活用事業」を通じて両国民の友好関係を次の世代にまで続けられるよう願っている。」と。

訪日団全員は、濱田理事長の言葉に深く心を打たれた。我々は今後も引き続き「教育研究

図書の有効活用事業」を実施すると同時に、この事業を通じて新たな行動を起こし、双方向の交流を行い、資源の共有を拡張していきたいと考えている。

(3)図書館の見学

訪日中に、早稲田大学図書館、国際基督教大学図書館、国立国会図書館、立川市立中央図書館等いくつかのタイプの図書館を見学した。見学の先々で日本の図書館が示してくれた「利用者本位」、全ての利用者層を対象としたサービスの提供という図書館サービスについての現代的理念には、我々が見習わなければならないものがある。

国立国会図書館は、日本の国家図書館である。館内の蔵書資源は非常に豊富で、サービスのコンセプトも非常に斬新である。日本全国のあらゆる図書館と個人が、国会図書館を利用することができる。いかなる国籍の人でも入館証を無料で作成することができる。館内のレイアウトもすべて読者の利便性を考慮した上での配置である。館内のいたるところで館内地図や書庫と図書室の分類と開架図書場の所図を見ることができる。また、館内には2ヶ月ごと設定される1つのテーマに基づき、関連資料を紹介・展示する特別展示コーナーもあり、サービス内容に関する大量の情報が利用者に提供されている。館内の設備は先進的であり、図書館の管理についても一貫して科学的であり合理的である。インターネットにより日本全国から図書館の蔵書を検索することができる。図書館の入り口には「真の人生の舞台は未来にある。」という名言が掲げられており、人生の舞台が待ち構えている未来の礎を築くという図書館の役割が表和されている。

早稲田大学図書館は、伝統と革新が融合された図書館である。管理は開架方式である。図書館の入り口を入れば、利用者は図書館の全ての資料を利用することができる。度重なる増築にも拘わらず、館内のレイアウトについては終始一貫読者の利便性が考慮されている。書庫は満杯の状態にあるが、乱雑さは感じられない。書棚の上には色分けされたランプが付けられ、図書の分類を示している。混雑は微塵も見られない。その一方で、パソコンが使いこなせない高齢の利用者用に、検索ロビーには伝統的な図書カードが完全な形で保存されており、利用され続けている。ここからも利用者本位というサービスのコンセプトが伝わってくる。

国際基督教大学図書館は、特色ある図書館である。この図書館のサービス理念は、図書館が最大限利用できるように読者を誘導するということである。教師と学生の貸し出し冊数については制限がない。さらに、館内のセミナー室や研究室等のレイアウトにも個性化サービスという特色が充分に反映されている。蔵書構成を重視し、大学の専門性や学生の資質向上の教育に中心を置くことが運営理念であり、この図書館の特徴となっている。また、車庫の自動化の程度が高く図書館の管理水準も高い。この見学を通じて我々の視野は広げられた。

立川市立中央図書館は、公共図書館であり、利用者本位、あらゆる利用者へのサービス提供を最優先課題としている。立川市の1平方キロに1図書館という計画に従って、市民の図書館利用に最大限の利便性を提供できるよう、立川市財政支出の(14%を占める教育費のうち18%)が図書館経費として使われている。日本においては、どれ程、市民の文化的資質の向上や文化的な生活が重視されているかよく分かった。

（4）㈱ヤマタネ鶴見倉庫や「教育研究図書の有効活用事業」に関わっている機関を訪問することにより、日本の効率的な作業内容、真摯な勤務態度、先進的な管理理念を実感した。

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

－馬を走らせて日本を見る－

広西師範大学図書館　姚　倩

私は日本科学協会の招請を受けて光栄にも第 3 回中国大学図書館担当者訪日団に参加できた。中国医科大学、黒竜江大学、ハルビン医科大学、牡丹江医学院、黒竜江東方学院、延辺大学、長春師範学院、大連外国語学院、遼寧師範大学、大連医科大学、清華大学、南京大学、江南大学、上海交通大学、寧波大学等の図書館館長の仲間達と共に飛行機で 2005 年 1 月 17 日に東京に到着した。そして一週間の友好交流のための訪日が始まった。

東京印象

飛行機は成田空港に着陸した。招請側の日本科学協会常務理事梶原義明先生、課長顧文君女史はすでに空港で親切に我々を待っていた。車で成田空港から東京まで高速道路を約一時間で走った。窓外を見ると、思わずこの小さな島国で日本人が作った奇跡を感嘆した。東京湾側に海は波が打って光らせている一方、都会側は高層ビルの群れが聳え立っている。海をまたがる大橋、高速道路、高架橋が縦横に交差している。道路には銀色の車が川のように流れている。色とりどりの電飾広告版や字幕が相互に映し合っている。これらすべては繁忙で繁華な現代化大都会に特有するものである。道路両側の高層ビルの下はもともと海だったと紹介された。日本人は東京湾を埋め立てて多くの高層ビルを建てた。また、都心の建物はだんだんと地下を掘っていき、地下7階までもあると聞いている。

東京に到着した夜、濱田隆士日本科学協会理事長は、歓迎宴を設けてくれ、情熱が溢れる挨拶をなされた。日本科学協会は 1924 年に設立した。日本財団の助成を受け、長期にわたり世界平和の維持と、科学、教育、文化の発展の促進、及び世界各国間の科学、教育、文化面の友好往来と協力を推進してきた。1997 年から日本科学協会は日本国内の企業、大学、研究機関、出版社の協力を得て図書を収集して分類と整理をしてから海外大学の図書館に寄贈している。統計によれば、2004 年末現在、中国の 17 大学に延 120 万冊以上の図書を寄贈した。受贈大学側としてのわれわれの感謝の気持ちを表するために、東京着後の翌日、曽野綾子

日本財団会長と笹川陽平日本財団理事長等の方々へ表敬訪問をした。そして日本科学協会創立 80 周年記念大会に出席した。

日本科学協会の細心な手配により、われわれ一行は、日本政治の中心である国会議事堂(参議院)を見学した。そして東京の地下鉄と電車に乗り、銀座、新宿、秋葉原の夜の街を歩いた。日本の名勝地――富士山、大涌谷火山噴火跡地、箱根の彫刻の森美術館を見学し、有名な東京ディズニーランドを遊覧した。

東京の銀座から桜田の大通りの両側にまっすぐの銀杏の並木があり、その大通りの突き当たりに白い建物の国会議事堂が立っている。国会議事堂の中央の部分は9階の塔であり、その他の部分は3階建てである。国会議事堂の四周は庭であり、草木が生え、花々が咲き乱れている。正門から入ると、国会議事堂の正面ホールになる。ホールの四角に大理石の台がある。そのうちの三台に日本の憲政史に貢献した「功労者」の像が立っている。残った一台は空けているが、将来の偉大な政治家のために残しているといわれている。中央を境にして左側は衆議院で、右側は参議院である。参議院の会場は演壇を中心に議長席、国務大臣席、内閣総理大臣席、事務局職員席などがある。議長席の後ろに幕が垂れている席は天皇席である。演壇の対面に扇状の議員席は 460 席がある。演壇の向こう側の2階には外国使節席、記者席、一般国民の傍聴席がある。通常国会は年に一回開催され、会期には18歳以上の日本国民であれば誰でも傍聴することができる。閉会期に国会議事堂は一般見学者に開放する。毎日、多くの内外の見学者が国会議事堂を見学にきている。われわれが国会議事堂を見学した時に先生に引率されている小学生達に出会った。小学生の手に小学校のテキストを持っている。テキストの表紙には国会議事堂の写真が載っている。中には日本の国会や日本の政治体制の内容が書かれている。ガイドが国会議事堂の説明をしていた時は、日本の政治体制に対する誇りが伝わってきた。

東京の交通は非常に便利である。いたるところで「駅」という文字が目に入る。「駅」に入れば地下鉄や電車に乗れる。交通線路の指示は非常に明確である。どこに身を置かろうとしてもどこへ行こうとしても線路図を見れば簡単に乗るべき路線が判明できる。東京の街は、非常に清潔である。風が強い日でも埃が飛んでおらず、雨の日にも道路に泥水が流れることがない。道路工事や清掃はほとんど夜間に行われる。東京の道路は狭いが一方通行の制限等により、車が多いにもかかわらず交通事故や渋滞が少ない。銀座は、東京の一番の繁華街であり、そこには日本でもっとも高価な服飾や化粧品があり、最も優雅で綺麗で、多才多芸な歌舞伎がある。新宿は東京における一番のビジネスの街である。町をぶらぶらしている人やショッピング客で溢れている。新宿にある「都庁」は、東京における一番高い商業ビルである。45 階の展望室から東京湾が一覧できる。遠い彼方に富士山が見える。夜の幕が降りると、東京全体は灯火の世界になり、太平洋の海面に浮かれている真珠のように見える。

東京から富士山まではバスで約4時間かかる。富士山は、本州の最高峰である。(山頂は)噴火後の火山灰に覆われ、樹木がなく年中積雪している。冬には山全体が真っ白になり、輪郭がよく見え、聳え立っている。夏になっても頂上は依然として雪に覆われている。富士山は神

山と見なされて大和民族のシンボルである。富士山の周辺に大小数知れない温泉がある。富士山の近くに日本全国に名を馳せる遊覧の名勝地——箱根がある。毎年、秋になると、多くの日本人観光客、特に東京からの富豪達は車に乗って家族で温泉に浸かり、レジャーを楽しむ。箱根国立公園内の「彫刻の森」美術館は、日本国内の最初の屋外美術館である。草地に、小橋のそばに、森の中に、モダン派、抽象派、印象派等それぞれの流派の大型彫刻100以上が展示されている。ロダンの「バルザック」、エミールーアントワーヌ・ブルーデルの「弓を引くヘラクレスー大」、ヘンリームーアの「ファミリーグループ」、ニキ・ド・サンファールの「ミス・ブラックパワー」、新宮晋の「終わりのない対話」、井上武吉の「天をのぞく穴」等がある。美術館の室内にはピカソ、ルノワール等の名画家の絵画作品や撮影、彫刻、セラミック、金器等の芸術作品が展示されている。果てのない「彫刻の森」を漫歩し、寓意深遠な東西各国の芸術を吟味し、風に揺られる緑陰と広大で蒼茫な山間の美景に耽け、日本の民俗、民情、民風の一端が覗かれる。

東京ディズニーランドは世界最大規模のディズニーランドだと聞いている。すべてのスポットを遊ぶと少なくとも4日間がかかる。入場券は非常に高いにも関わらず、多くの客が集まってくる。園内には、世界各国の歴史、地理、名著、童話の物語の登場人物や動物があり、模擬音響や本物そっくりな道具等は、本物の世界に身が置かれているようである。カリブの海賊、ジャングルクルーズ、蒸気船マーク・トゥイン号等は、新奇、誇張、刺激に満ちている。アトラクションやスペースマウンテンはハイテクの魅力を見せている。世界一周の旅、童話世界はそれぞれの国やそれぞれの民族の風貌を見せている。パレード大行進のミッキーマウスの可愛らしい姿、ドナルドダックのユーモア、姫の美貌、王子のハンサムさのそれぞれが余すところがない演技、それぞれの役と子供達との触れ合い、熱心に子供達に動作を教えている姿、子供達は小さい頃からも東西の文化と芸術、歌と踊りの影響を受けている。

日本滞在中、日本財団ビルや横浜に設置する日本科学協会の図書整理作業場や各種類の図書館を見学した。日本人の仕事の場面を自分の目で見た。事務所にはIDカードを首にかけている職員達がそれぞれの職務に忠実に、責任強く仕事に打ち込んでいる。勤務中の談笑は見られない。きわめて仕事に集中し、厳しく自律している。サービスの場においてもいたるところに親切な眼差し、心を込めた微笑、九十度近くのお辞儀、日本人が生まれ育った環境から身に付けた礼儀正しさと素養及び職業道徳意識を感じられる。それに対して中国のいたるところで見慣れている冷たい眼差し、面倒くさそうな顔、叱り付け、喧嘩等は日本で全くみられない。図書館を見学した際に、何回も撮影は断られていたが、彼（彼女）が「NO」といった場合もその眼差しや手振りから申し訳ない気持ちが伝わってくる。まるで許してくださいといっているようである。説明によると、日本は、集団意識、秩序、等級が厳しい社会である。会社の社長は絶対な権威を有する。一般職員は上司に対して絶対服従する。会社のボスは簡単に従業員を首にしない。会社は倒産しない限り、たとえ家族企業においても社員は基本的に終身雇用である。日本人は自分が勤務している会社や自分の職業については誇りを持っている。日本人は、一旦就職すれば生涯その会社で働く。転々と会社を変えたり、ポストを変えたりす

る場合、好き嫌いがあるとか、勤務態度がよくないとかと判断される恐れがある。従って日本の社会は相対的に安定であり、治安や秩序も相対的に良い。犯罪事件もたまにはあるが警察の検挙率が非常に高い。例えば、東京に到着後にテレビで宮崎市の道路側に女性の死体が発見したと報道されたが、24 日東京を離れる前に、すでに犯人が検挙され、捕まったとテレビが報道されていた。

短い七日間の見学と訪問は馬を走らせて見物するようなものであるが、先進、発達、文明、礼儀正しい日本は、われわれに非常に良い印象を残してくれた。日本、成田空港に入った一刻から日本科学協会の梶原義明先生、顧文君女史、南保女史、宮内女子、華先生は終始われわれと共に行動していた。細心で周到にわれわれの宿泊や毎日の日程を手配してくれた。滞在中は真冬であるにも関わらず、全員が東京の気候が暖かいという印象があった。滞在中に日本国内の世論には反中の声があったが、日本の有識者の方々が中国に対する友好、親切、気前のよさを感じた。短い7日間の滞在を通じて中日双方はすでに深い友情で結ばれた。別れた時にお名残惜しい気持ちで一杯であった。訪日を終えて帰国の日に、梶原義明先生、顧文君女史、南保女史、宮内女史は、朝からホテルに来て空港まで見送りに来てくれた。セキュリティゲートを出て出国ロビーに入って振り返ってみると、皆様が人群れから手を振ってくれていた。その場面は私の脳に刻みこんで永遠に忘れられない思い出となった。

日本の図書館の印象

図書館業の担当者訪日団として7日間の短い滞在であったが、日本国立国会図書館、立川市立中央図書館、国際基督教大学図書館、早稲田大学中央図書館を見学し、日本の図書館界の同業者達との交流ができた。

日本国立国会図書館は「日本図書館法」に基づいて1948年に設立した。「真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命とする」ことを宗旨にしている。図書館法に規定される納本制度に従って日本国内のすべての出版物を収集して日本の文化遺産として永久に保存する。サービスの重点は国会、行政、司法、政府各省庁、最高裁判所、地方議会への提供である。同時に目録を発行し、データベースをつくり、日本国内と海外へのサービスを提供する。国会図書館館長は衆参両院の議長等の協議を経て国会の任命を受ける。国会図書館館長は国務大臣待遇である。図書館の職員は公務員試験に合格したものから採用する。図書館の予算は、衆参両院の運営委員会の審査と批准が必要である。2002年の統計では、国会図書館は館員 920 人、年間予算 263 億 6790 万円である。図書館には蔵書790 万冊、地図 43 万枚、マイクロフィルム 38 万本、マイクロ写真 700 万枚、ジャーナルと新聞 17万 6000 種類がある。日本国会図書館館舎は、東京本館、関西館、国際児童図書館の三箇所がある。関西館は、京都、大阪、奈良三府県の関西研究域内にあり、2002 年に開館した。建物面積は5 万 9500 ㎡である。国際児童図書館は、従来の帝国図書館を改築したもので、ルネサンスの西洋風建築である。建物面積は約6671 ㎡である。われわれが見学したのは東京本館である。東京本館は、本館と新館からなるが、本館が 1968 年に、新館が 1986 年に完成した。本館の中央には 17 階

の書庫がある。新館は本館の北側にあり、地下 8 階、地上4階の建築である。本館書庫の四周と新館の地上には事務所や法令議会閲覧室や憲政資料室や古籍資料室、地図室、人文総合情報室、科学技術経済情報室、法律、政治、政府機関資料室、電子資料室等 17 の専門閲覧室がある。国会図書館の蔵書は閲覧室に開架している図書以外に殆どが閉架図書で中央書庫に保存されている。書庫は常時温度 22℃、湿度 55%に維持している。そして二酸化炭素消火装置、垂直と水平のコンベヤがある。総合貸出カウンターは本館の東門にあり、入り口に数台の自動図書カード発行機がある。18 歳以上の日本国民は誰でも自動カード発行機で図書カードを作り、国会図書館の読者になれる。カウンターの右側はインフォメーションになっている。貸出ホールには、50 台のコンピュータ検索端末があり、読者が自ら目録を検索し、借り出し申請票を記入して図書を申請することができる。借り出し申請票はコンベヤを通じて中央書庫に行き、書庫の職員は申請されている図書を取り出したり、必要な部分をコピーしたりしてコンベヤを通じてカウンターに運び、読者に手渡す。館舎の建築構造は複雑だが、館内や館外のいたるところにも明確な印があり、閲覧室の内外には室内の蔵書や本棚の配置図がある。そして図書館利用時間表、サービス内容及び各種類の利用資料が用意されている。読者に最大な利便性を提供している。東京本館は毎日 2000 人以上の読者が利用している。一日あたりの平均閲覧図書は 6000 冊以上であり、年間相談件数は 30 万件になる。

立川市は東京郊外にある閑静な町である。立川市立図書館は立川市の中心地にあり、入り口には図書館サービス5か条が書かれている。すなわち、誰でも利用できる図書館、人生に有益な図書館、新設で居心地の良い図書館、自由に取り出しできる図書館、ゆったりして本を読める図書館である。図書館にいればこの5カ条はいたるところで感じられる。2 階から 4 階までは開放式であり、センターには階段がある。カウンターは階段の向こう側にあり、ホールの中央に位置してある。周りに一般図書、ジャーナルと新聞紙、立川市行政資料等が置いてある。そして目の不自由の方や身障者のための盲文版の本や音声閲覧室がある。3階は、視聴資料、辞書、若者向けの出版物、外国人留学生や出稼ぎの人達のための外文図書等が置いてある。4階は、朱に視聴資料検索室や児童閲覧室である。児童閲覧室の壁には子供向けの動物模様の漫画等が貼っており、形が独特な本棚や布で作られた本や可愛い人形等が置いてある。我々が見学した時、町にはあまり人影が見られなかったが、図書館内には空席がない。2階には年寄りの読者が多くいた。老眼鏡を掛けている人や方、虫眼鏡を使っている人がいて、くつろぎながら本を読んでいた。3階には、リズムの速い青年読者と学生達が多い。児童閲覧室には、子供達のそばには親が付いていて一緒に本を読んでいる。床に座ったり、本棚のそばに座ったりして本を読む子供もいるし、室内で走り回ったり、床に這い回ったりして遊ぶ子供もいる。説明によると、市川市立図書館には 35 万冊の蔵書があり、館員 41 名が働いている。これらの館員は、立川市の身障者の貸出図書の郵送サービスを提供する以外に、立川市5つの分館の集中取材、目録編集、流通、他館への貸出サービスも提供している。2003 年に立川市立図書館の貸出数は延 146 万冊であり、市民一人平均 8.8 冊である。

国際基督教大学は 1949 年に三鷹市第二次世界大戦時代の米軍飛行場の跡地に建設された。日本の民間団体と北米キリスト教会の募金によって作られた大学である。国際基督教大学は、文

科系の大学で、人文、社会科学、理学、言語、教育、国際関係論、行政、比較文化等の学科がある。国際基督教大学は、図書館の建設を非常に重視している。図書館への予算を増やしつつある。蔵書数にしても館舎建設費にしても並びに読者利用回数にしても日本の大学に前位にある。2004年の図書購入費には、一般の図書が 1 億円、ジャーナルや電子雑誌 5000 万円、デジタル資料2000 万円である。1960 年と 1972 年に完成した旧館と、2000 年に完成した新館の三つの建物は隣り合っている。新館舎には 120 台のパソコンを設置しており、学生達は無料でインターネットを利用して検索することができる。特に語らなくてはいけないのが、この図書館の自動書庫である。自動書庫は 3～4 億円を投資して建設したものである。高密度の本棚、レール、水平移動または垂直異動のコンベヤからなる。本棚にはコンテナー単位に本を保存している。コンテナーは、ナンバーリングしている。コンテナー内の本はバーコードによって識別し、コンピュータによって自動アクセスすることができる。読者はコンピュータを通じて検索し、借りたい本を決めれば、コンピュータは自動的に所要図書が入っているコンテナーを見つけて自動運搬機を通じてカウンターに運んでくる。館員は、画面の情報に従って迅速に読者が借りたい本を取り出す。自動貸し出しシステムは、電子ゲーム機のようになっている。読者は、端末に本を置き、図書カードを差し込めば画面には貸し出しの記録が出てくる。本の磁気抹消も同時に行われる。検索、本の取り出し、貸し出し手続きの全プロセスは時間と体力がかからない。1～2 人の館員で対応できる。同じようなシステムを導入しているところは他に国会図書館の関西分館、千葉市中央図書館、京都府立図書館、立命館大学図書館、大東文化大学図書館等があると聞いている。

歴史由緒のある早稲田大学図書館は、1882 年に設立した東京専門学校図書館に遡ることができる。非常に感心しているのは、早稲田大学図書館は設備が進んでいることより、蔵書が非常に豊富で特色があり、開架率が高く、利用率が高いことである。図書館の蔵書は約 204 万冊あるが、古籍や貴重本が 50 万冊ある。その中に中国の古籍も含まれている。国宝級の蔵書――800 年前の中国古写本である『礼記子本疏義』、唐写本『玉篇』以外に、日本の江戸時代の文化遺産、明治時代の政府文献、維新志士の遺筆、近代の新聞、広告、名人手稿、中国の民間民俗資料、書道、名絵画等がある。そして中国の地方誌が非常に完全な状態で保存されている。

日本の図書館界の同業者の方々との交流を通じて分かったのは、日本の大学は、国立、公立、私立の三種類がある。一般的に、国立大学は歴史が長く、中央政府の予算で運営されている。従って授業量が安い。公立大学は、地方政府の予算で運営されている。国公立に対して私立大学は、財団

や基金会等の民間資金で運営されている。われわれが見学した国際基督教大学、早稲田大学は私立大学である。2004 年現在、日本全国の大学は、国立大学が 97、学生数が 62 万 6083 人、平均図書館蔵書数が 95 万 8317 冊、雑誌 5386 種類。公立大学が 76、学生数が 12 万 3723 人、平均図書館蔵書数が 23 万 1146 冊、雑誌 1267 種類。私立大学が 526、学生数が 217 万 3571 人、平均図書館蔵書数が 30 万 4641 冊、雑誌 1656 種類となっている。

日本の大学図書館の自動化検索システムは、国立情報学研究所から提供されているNACSIS-CAT システムである。同システムは、全国ネットワークであり、同じデータベースを共用す

る。各大学の図書館もこのシステムの目録データベースを共有しているため、各図書館が目録を作成する重複作業を省かれた。現在、このネットワークに加入しているのは、大学、短期大学、高等専門学校等の図書館、約 1031 であり、登録目録図書数は 7129 万冊である。

目下、日本の大学図書館は予算を増す傾向にある。特にパソコンの設置を増している。平均一図書館には業務用や学生用をあわせて 200 台以上がある。各図書館では学生が無料でパソコンを使いインターネットを利用して自由に検索することができる。情報利用技術を高め、現代のネットワーク情報資源をフルに利用するために日本の大学図書館はインターネット上で図書館利用知識や情報検索の方法を教える E—ラーニングを試みている。E—ラーニングは文字や写真や等の内容、音声や双方向の勉強方法や、インターネット上でテストする等の方法を採用している。学生は自分の状況や理解度に応じて勉強の内容を選択することができる。一定の操作によってインターネットの教育内容を変えることができ、場所、時間、教材、先生に制限されずに随時に勉強することができる。自宅でインターネットを通じて試験を受けることもできる。一部の大学は、新入生に対して図書館情報利用に関する E-ラーニングを受け、テストに合格しないと図書カードを申請することができないと規定されている。

日本文部科学省は、2000 年 11 月 28 日の生涯学習審議会答申において「情報弱者となる可能性のある社会人や高齢者に対する情報リテラシーの学習機会を拡充することが必要」とし「今後特に情報リテラシーを身につけるための学習機会が不足しがちな社会人、高齢者や女性などに対しては、生涯学習関連施設において、情報リテラシーに関する講座などを解説していくことが必要」と具体的に述べている。現在、日本の大学図書館は、情報活用能力の育成を、学生から市民にひろげる取り組みをいくつかの大学が行っている。情報利用能力の教育を学生から一般市民へと広げていく方法を試みている。大学は学生へのサービス提供に留まらず、市民の生涯学習の基地にしなければならない。約 10%の大学図書館は一般市民向けの図書館情報リテラシー教育講座を開催しているが受講者は50代から70代で過半数をしめていると紹介されている。

「第 3 回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

中国国際友好連絡会　馬　農

日本科学協会の招請を受け、第 3 回中国大学図書館担当者訪日団一行 18 名は、2005 年 1 月 17 日～1 月 24 日まで日本を訪問した。中国国際友好連絡会と日本科学協会の周到な手配により、訪日団は日本の関係各界から温かい歓迎を受けた。中日双方は実務者レベルの交流を真剣に行い、「教育研究図書の有効活用事業」についての認識を深め、中国大学図書館

担当者と日本の図書館担当者との交流と協力の強化を図り、実り豊かな訪問となった。

1. 訪日の概要

日本滞在中、訪日団は、曽野綾子日本財団会長、笹川陽平日本財団理事長、森田文憲日本財団常務理事、濱田隆士日本科学協会理事長、梶原義明日本科学協会常務理事を表敬訪問した。また、早稲田大学図書館、国際基督教大学図書館、国立国会図書館、立川市立図書館を視察し、㈱ヤマタネの倉庫、雪印乳業㈱横浜工場等を見学した。なお、東京滞在中に日本科学協会「創立 80 周年記念式典」と「日本の大学図書館の現状について」というテーマのセミナーに参加した。

2. 訪日の具体的内容

（1）日本財団、日本科学協会の主要責任者への表敬

日本財団を表敬訪問した際に、曽野綾子会長は、「中日両国は近隣であり、双方の相互理解と交流を深め、人々の往来を促進すべきだ。『教育研究図書の有効活用事業』は、教育分野における役割が大きく、『教育研究図書の有効活用事業』の更なる発展を期待する。」と語った。 また、笹川陽平理事長は次のように語った。中日両国が友好的な関係を維持することには非常に重要な意義がある。中国教育部は高等教育の発展を図っており、今後、中国の大学はさらに発展するだろう。IT時代において知識のデジタル化が進行しているにも拘らず、図書の果たす役割は決して縮小してはいない。図書館は大学の中心として教育事業において引き続き重要な役割を果たしていくだろう。日本財団の「教育研究図書の有効活用事業」は開始以来、中国側の支持と協力により順調に推進されている。多くの大学がこの事業のために担当者を定め、特設コーナーに寄贈図書を展示し、管理していると聞いており、非常に感謝している。「教育研究図書の有効活用事業」が中国の大学において優秀な人材の育成に貢献できるよう期待している。この事業により、両国の教育交流は必ずや強化されていくだろう。今後も「教育研究図書の有効活用事業」に関する中国の大学からの意見に真剣に耳を傾け、可能な限り中国側の要望に応え、より多くの有用な図書を寄贈できるように願っている。訪日団と日本の図書館担当者との間で、今後の図書館の発展の方向、並びに日本の図書館に存在している問題点について充分に意見を交換してほしい。

濱田隆士日本科学協会理事長、梶原義明日本科学協会常務理事は、訪日団と会見した際に、次のように語った。日本科学協会は科学知識の普及に力を入れており、その主な目的は、科学技術や教育分野における友好と協力を促進することである。日本科学協会は、日本の大学、研究機関、出版社、企業等から図書を収集して、これまでに累計 112 万冊の図書を中国の大学に寄贈した。訪日団の訪問を通じて日中の図書館相互の交流と協力をさらに増進させ、「教育研究図書の有効活用事業」の発展を促進させてほしい。図書寄贈事業を通じて日中両国の文化と教育等の分野における交流と協力をさらに促進していきたい。

(2) 日本科学協会「創立 80 周年記念式典」への出席

東京滞在中、日本科学協会「創立 80 周年記念式典」に出席した。日本科学協会、関係大学、「教育研究図書の有効活用事業」の協力先、並びに日本駐在中国大使館教育処等から100 人以上が出席した。曽野綾子日本財団会長、笹川陽平日本財団理事長、濱田隆士日本科学協会理事長、有馬朗人元日本文部科学大臣、日本駐在中国大使館教育処公使参事官李東翔、何钦成中国医科大学副学長、訪日団団長が式典で挨拶をした。

(3) セミナー「日本の大学図書館の現状について」への参加

田中功日本女子大学文学部教授は、セミナーにおいて「日本の大学図書館の現状について」というテーマで講義をした。日本の大学図書館の概要、特徴、デジタル化の進展状況、今後の発展について紹介し、大学図書館間のネットワークの構築と発展、資源の共有についての成果と問題点について説明した。その後、日本の図書館法という法律の役割、図書館の情報利用に関する教育の内容、図書館の管理モデルについて討論した。

3. 訪日団の成果と訪日の感想

中日両国の努力及び関係先の協力により「教育研究図書の有効活用事業」は大きく発展してきた。中国の大学においても反響は非常に大きい。中国の大学図書館は年間予算が限られており、自らの財力では教育事業における図書に対する需要を満たすことはできないのが現状である。日本科学協会の「教育研究図書の有効活用事業」には、中国の大学図書館における外国語図書の不足を緩和し、大学の教育能力の強化と教育水準の向上に寄与するという明確な目的がある。寄贈図書を通じて海外の先進的な科学知識や社会発展に関する最新の情報を紹介し、教員や学生の専門知識の水準向上、さらに大学の国際化に貢献しており、大学からは歓迎の声が寄せられている。今回の訪日を通じて「教育研究図書の有効活用事業」の具体的運営方法を視察し、日本の図書館担当者との実務者レベルの交流を通じて日本から先進的な経験を学ぶことができた。このことは、中国の大学図書館の発展を積極的に促進するという点で役割を果たすことだろう。中国国際友好連絡会の支持下「教育研究図書の有効活用事業」が絶えず発展し、中日両国の文化、教育分野における交流と協力がさらに促進されるよう期待している。

2005 年 1 月 26 日